

俳句雑誌

令和八年十月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十九巻第十号

水 明

2026 10月号



《今月のかな女》

餘念なく柿落す頬に日のぬくし

『龍膽』所収 昭和二年

長谷川かな女

本句は、一読してその句意が明快な俳句であるが、柿はかな女宅のものか、それとも、他家のものなのか、柿を落としているのは誰なのかなど、幾つかの事柄が想像できる。筆者として、柿はかな女宅の庭の柿の木のもので、落としているのは夫の零余子と想定した。柿の木は脆く、上って挽ぐのは危ないので、地上で又の付いた棹を使って柿を挽ぎ取っているのだと思う。側でかな女があれこれ指図している様子も見えて取れて面白い。雑念を払い除けて柿に心を傾注している零余子は、一家を支える夫の顔に成りきっている。秋の陽が、夫婦に惜しみなく降り注いでいる。

(鬼之介・註)

今月の巻頭句

季音雪

人形の髪に挿したる野紺菊

大場順子

季音月

かき氷くづしても崩しても才女

正木萬蝶

季音花

悠久の頁をめくる曝書かな

越田栄子

水明集

雨脚は生絹のひかり立葵

本橋稀香

鼓笛集

白靴のりハビリ励む廊下かな

木谷葉子

山紫集

旧姓で名乗る女の巴里祭

日高道を

水 明

令和 8 年
10 月 号

今月のかな女

今月の巻頭句

黙 劇 (作品)

棚 田 の 郷 (近詠)

帰 省 (近詠)

雪 嶺 雪欄作家作品鑑賞

ゆ ず り 葉 季音月評

季音「雪」 (同人作品)

季音「月」 (同人作品)

季音「花」 (同人作品)

『水明誌』を繙く

句集喝采

現代俳句鑑賞

季音賞作家の頁 (私の三句)

保坂翔太・横山君夫・笹本啓子

山本鬼之介

保坂翔太

横山君夫

染谷風子

檜鼻ことは

大場順子
菊池ひろこ
大村節代
ほか

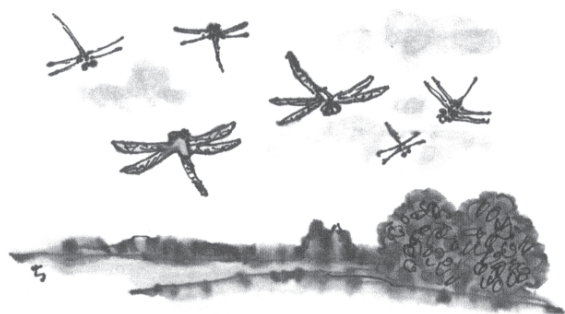
正木萬蝶
大塚茂子
河野はるみ
ほか

越田栄子
梅澤輝翠
染谷風子
ほか

岡田美幸

菅原卓郎

網野月を



水明集

本橋稀香 飯田忠男
倉田星歩 ほか

作品鑑賞

山本鬼之介

46

水琴窟（水明集八月号鑑賞）

池田雅夫

50

山紫集

網野月を

52

山紫集作品評

青木鶴城

56

鼓笛集・作品評

梅澤輝翠

58

俳誌望見

青木鶴城

63

水明夏行の記

風声・水明発展基金御礼

64

水明の記事他誌転載

水明例会報・各地句会報

67

水明塾のご案内

後記

70

後記

72

後記

77

後記

題字…長谷川かな女 表紙…内田恵子 カット…福田千春

黙

劇

山本鬼之介

酔芙蓉小指を立ててロゼワイン

ゆらりゆらりと軒燈籠は猫嫌ひ

その花を爪紅と言ふ老夫人

雷神のパントマイムか稲光

大糸瓜でかい面して揺れてをり

広椽の梁は十間秋の声

目頭じんと久に故郷の竹の春

蔵の窓開けたつぶりと秋の風

棚田の郷

保坂翔太

七 百 年 の 旧 家 の 門 や 桐 の 花
 大 杉 に 埋 も る る 鎮 守 蟬 時 雨
 峠 よ り 見 下 ろ す 棚 田 青 葉 風
 嘗 て に 帰 る 老 の 訛 や 青 田 波
 空 き 家 に も 屋 号 は 残 り 茗 荷 の 子
 草 笛 を 山 鳩 じ つ と 聞 い て ゐ る
 家 持 の 伝 説 の 池 と ん ば 翔 ぶ

わが古里の伝説「松山鏡」は、『大伴家持が蝦夷征伐失敗の罪で越後に流され、松之山の中尾に来て、篠原刑部左衛門と名前を変えて、「鏡ヶ池」のほとりに住んだ。その篠原刑部左衛門の娘が義母にいいめられ、母の面影を求めて「鏡ヶ池」を覗き込み、水面に写る自分の姿を母と思い、この池に飛び込んで死んでしまった』というお話です。奈良時代の歌人でもあった大伴家は、越中守として、越中の国に赴任していたことがありますが、越後の国に住んだことはなく、この物語は史実ではないとのこと。しかし、この伝説は、尋常小学校の教科書に載り、謡曲や落語にもなっています。

「松山鏡」とは越後国頸城郡松之山郷のこと。松之山郷は、現在の新潟県十日町市松之山中尾に存在します。この「鏡ヶ池」が「松山鏡」の具体的なモチーフや舞台になったわけではないようですが、地域の人々に愛され、十日町市登録地域文化財に指定されています。

帰省

横山君夫

故郷は母のふところ早稲の秋
宵のバス扉開くたび虫時雨
実家への近道いまも稲穂波
デザートまで白えび尽し帰省膳
家譜のこと語れば長き夜となりぬ
今朝の秋立山劔間近なり
振り向けば見送る義姉に秋の風

今年もお盆を過ぎてから帰省した。一年ぶりである。

私の故郷は、富山県のはば中央部に位置する射水市。雄大な立山連峰を望む、海や川、平野の豊かな自然に恵まれたまちである。

「射水」の地名の初見は、万葉集にみえ、奈良時代の歌人大伴家持の歌が今も息づくまちである。

大伴家持は七四六年から五年間、越中国の国守を務め、国府のあった射水の地で、自然や人々の暮らしに心を寄せ多くの歌を残した。

三島野に霞たなびきしすがに
昨日も今日も雪は降りつつ

我が母校の家持の歌碑

時代は変わっても、故郷の自然や歴史が、人の心を支えることに変わりはないと思う。故郷は今も私の心のよりどころである。

雪 嶺

● 季音雪欄作家近詠鑑賞

染 谷 風 子

◇まだ来ないゝ夏の花ゝ（七月号）

網野月を

この雨にまだ来ぬ人を苧環の花
破れ傘錦之介丈の太刀捌き
橋蔵の投げ銭拾ひ浮葉花
切傷に血の痕はなき赤薔薇
昼顔の風を報せて咲きにけり
夕顔や真夜過ぎてなほ瑞瑞し
言葉にしては詮無きものよ鳶の花

月を俳句は解釈も鑑賞も難しい。今回も独善独断で鑑賞を進めたい。一句目、苧環の花は色が鮮やかで美しいがどこか寂しげである。この句から連想するのは、静御前が頼朝の前で舞った次の歌である。（しづやしづしづのおだまきくり返し昔を今になすよしもがな）。頼朝を激怒させたが、愛する義経への命がけの恋心は最後まで能や長唄に残されている。二句目、一九七〇年代のTV番組に「破れ傘刀舟悪人狩り」があった。萬屋錦之介演じる蘭方医が夜は悪人達を切り捨てる痛快時代劇だ。三句目、これは銭形平次。浮葉花の傍題に銭荷がある。四句目、血と赤薔薇なら三島由紀夫だ。同氏の写真集に『薔薇刑』がある。五句目、仏伊合作映画でカトリイヌ・ドヌーブ主演『昼顔』を想起させる。六句目、夕顔に浮ぶ白い花は果敢無げであるが野趣もある。『源氏物語』の「夕顔」のイメージだ。七句目、句作り上の作者の溜息か。

◇藤波（七月号）

丸山マズミ

切岸に揺るる紫藤の花
池の面に藤波匂ふ浜離宮
藤波の香りも乗せて川下り
銀山の遺構隠せり藤の花
昨夜の雨乗せて藤波しぶき揚ぐ
藤波や匂ふ大津絵藤娘
絡み付き城壁上る藤の花

藤波の連作七句。一句目、切り立った険しい崖に咲く藤の花の一景、春風に揺れる花穂が美しい。二句目、浜離宮恩賜庭園の海水を利用した潮入池池塘の藤波を詠む。作者は敢えて「匂ふ」と表現する。「匂ふ」は雅語で「色がひときわ美しく照り映える」意だ。三句目、隅田川の水にバスに乗っても藤波の上品な甘い香りが未だ消えない。四句目、「銀山」は生野銀山か。近くに藤の名所で知られる白井大町藤公園がある。六句目、大津絵の藤娘を詠む。大津絵は近江国大津の追分や三井寺の周辺で売られていた素朴な民芸的絵画だ。東海道を往来する旅人に手軽な土産物として重宝された。「藤娘」は大津絵の画題の一つで、藤の花の模様の衣装を着て藤の枝を肩に黒笠を被った娘姿だ。江戸っ子には良縁を結ぶ護符として喜ばれた。七句目、唐津城の一景か。唐津市の市花は藤だ。藤の名所を縦横に詠んだ季節感溢れる七句である。

◇虹とこしへに（八月号）

梅澤佐江

参道に沢の水音苔の花
万緑へ老鶯の声澄み渡る
薫風や虚子の矢倉は数歩先
朱夏の墓師に見えむと斜め建て
小さき墓へ心尽しの額の花
夏めく墓碑に朱の文字幽か「伊藤柏翠」と
朱文字に秘むる至上の愛や不如帰

高浜虚子と愛弟子森田愛子の眠る寿福寺の吟行句。寿福寺は頼朝が没した翌年正治二年（一二〇〇年）、妻政子が榮西を開山に招いて建立した鎌倉五山第三位の寺である。一句目、総門から中門まで伸びる石畳の参道は樹木に覆われ実に静かである。二句目、寿福寺の墓地は源氏山の山麓にあり、作者は万緑の中に老鶯の声を聞く。季節感、臨場感の溢れる句だ。三句目、虚子の墓は「やぐら」と呼ばれる岩を掘った中にある、中央が虚子、左が四女の六、右が孫娘の防子の墓である。なお、虚子の墓を右へ行くと政子と実朝の墓がある。四句目、虚子の自伝小説『虹』のヒロインで、結核のため二十九歳で逝去した森田愛子の墓が虚子の墓を斜めから見詰める様に立っている。作者はその薄幸の女性の小さな墓を「師に見えむと」と表現している。短い人生を俳句に生きたヒロインと虚子の師弟愛の滲む句だ。五句目、作者は愛子の小さな墓に持参した額の花を手向ける。折しも源氏山の蟬時雨がけたたましい。六句目、愛子の墓の建立者は、共に重い病を患いながらも愛子を支えた同門の伊藤柏翠だ。七句目、愛の絶唱句。

◇追憶の母（八月号）

近藤徹平

敵潜に怯えし母子冬の海
喘ぐ子に我が命をと母寒夜
苛め児にせめて噛みつけ母四月
敗戦忌「ギブミーチョコ」を叫びし妣
終戦日考の帰国を待ち星に
盂蘭盆会慈愛菩薩の笑む写真
カーネーション妣の二倍半生かされて

添付のエッセーによれば作者は昭和十一年満州に生まれ、昭和十八年七歳の時、母上の病氣治療のため母上と弟妹の四人で内地に引揚げて来たとの事。病身で幼子三人を育て、若くして亡くなった母上への鎮魂の七句である。一句目、昭和十八年には既に米海軍の潜水艦が日本海や朝鮮沖に出没していたのである。二句目、命に換えても我が子を守ろうとする尊い母性愛。三句目、都会育ちの子供が疎開先の田舎の子供の苛めにあつた話はよく知られている。「苛められたら苛め返せ」と母上の励ましと叱声。四句目、戦争に負けても日本人の魂と心までも失つてはいけなさと進駐軍への物乞いを厳しく叱つた、嬭やかの中に日本人の矜持と誇りを持った母上。五句目、父上が満州より帰還するも間もなく天に召された母上。作者の無念さが滲む句だ。六句目、重荷を背負い続け、若くして逝去された母上の遺影は慈愛菩薩の如く笑みが美しい。七句目、母上への感謝を作者は一時も忘れることはない。胸中を熱くする七句である。作者は平成二十九年五月号水明に引揚當時を回想した手記を寄せている。再読をお勧めする。

ゆずり葉

◆季音八月

檜 鼻 ことは

仏弟子になりたき蟻が末席に

大橋 勉代

菩提寺での法要か何かの席で畳の縁を行く蟻に目を止められたのでしょうか。読経だけが聞こえる静かなお堂で、小さな蟻は自ら進んで末席に向かっているかのようです。その姿は、目立とうとせず謙虚に仏の教えを受けようとしているように思われてなりません。小さな蟻の姿に慈しみを感じ、同じ場に迎え入れようとする作者の眼差しはあたたかく、句の温度となっています。

「仏弟子になりたき蟻」の措辞は、作者の願いを蟻に託されたのだと思います。仏道への憧憬をユーモラスかつ敬虔に詠まれた一句だと思います。

父の顔して父の日を遣り過ぐす

五明 昇

大方のところ、父であることを自覚して日々の生活を送つ

ている男性は少ないのではなからうかと思うのですがいかがでしょうか。

ところが、今日は「父の日」ということになる、少なからず父ということを感じずにはいられなくなるのが世のお父さん方の姿でもありましょう。

「父の顔して」がとても巧みで、単なる表情ではなく、父としての役割や立場そのものを暗示しつつ、「父の日」という特別な日の、照れや、少しは感謝されたいという期待を隠しながら、いつものように振る舞っている父というものの姿がにじみ出てくるのです。下五の「遣り過ぐす」も実に味わい深い言葉、総じて「父の日」における世の父親の心情を巧みに描いた微笑ましい一句です。

若葉風 詩人の魂の宿る家

曲淵 徹雄

青々とした新緑を吹き抜ける若葉風と、詩人の魂が宿る家、

読んだだけで瑞々しく、そして静謐な詩的な情景が広がるようです。

もう三十年も前のことになりますが、ワーズワースの家を訪れた時のことを思い出します。英国、湖水地方にある白壁のコテージ、新緑の中にまことに美しく、中に入ると当時使用されていた調度品、机などが、そのままに残されおり、長い歳月を経て今に残る詩人の記憶を、時折吹き抜ける風がやさしく包み込むような景色でした。

さて、訪れてみたいと思っている場所のひとつに、さいたま市別所沼にある風信子荘があります。詩人であり建築家でもあった立原道造が構想していた小さな週末用の住居。道造の死後、建てられたと伺います。「僕は、窓がひとつ欲しい。あまり大きくてはいけません。そして外に鎧戸、内にレースのカーテンを持つてゐなくてはいいけない」と道造が思い描いたその小屋を一度見てみたいのです。

詩人への追慕と文学への敬愛が漂う句を拝読し、つれづれにそのようなことを頭に浮かべたしだいです。

土手をゆく白きバラソル見え隠れ

原田 秀子

夏の川辺の明るさと、遠くを行く人の姿がまるで映画のワンシーンのように描かれています。土手の起伏や草むら、木立などに遮られて、バラソルが現れては消える、その断片的な見え方が、歩く速度や距離感を自然に伝え、句に時間の流

れを生み出しています。

白いバラソルの持ち主が誰であるかは語られていないがゆえ、バラソルの持ち主が妙齡のご婦人なのか、少女なのか、それとも旅人なのかと想像しつつ、夏の午後、風の吹く土手道を遠ざかってゆく白いバラソルに、淡い憧れもしくは郷愁のようなものを感じた一句でした。

田植機の届かぬ隅を田植る母

岡田 宣子

田植えが手植えから、田植え機に移行していったのは昭和四十年代半ばからだったでしょうか。これにより田植え作業の効率化、労働の軽減化がなされ、農作業全体の機械化も進んで来ました。しかしながら、便利にはなったものの、面積の狭い田んぼ、形がいびつな田んぼ、また面積の広い田んぼでも場合によっては、どうしても田んぼの隅のほうが残ってしまふことがあります。

句は、農作業の風景を写実的に描きながら、母の働きと米作りに愛情を注ぐ母の姿を静かに浮かび上がらせるように描いています。泥に足を取られながらも身をかがめ一本一本苗を植えてゆく母の姿。そこには長年培われた手仕事の確かさと、苗一本を粗末にしないという田仕事への実直な姿があります。

機械化が進んでも、最後に残る細部を担うのは人であるという事実、農村の暮らしの現実と温かさを感じた一句です。

季音雪

身に入む 大場順子

今日の事は今日で忘れて水を打つ
稲妻やおのころ島の見え隠れ
稲妻や庄内平野米どころ
身に入むや巴の墓は石一つ
人形の髪に挿したる野紺菊

海開き山開き 大村節代

海開き短く髪を切り揃へ
ラムネ玉少女はそつと天仰ぎ
山開き天狗に会ひに霊山へ
夏霧やぐらりと揺るるロープウェー
仏足石称ふる歌碑に滴れり

夏 海 菊池ひろこ

蜥蜴出で翳と日向の曖昧に
幼子に夏海の青生ぬるし
初鰹高きに家族写真置き
梅雨明けの遅き大名屋敷跡
石壁に石の花咲く巴里祭

凱歌 五明昇

嘶きを遠音に馬塞の蝸牛
滴りに誰が備へたる竹柄杓
打水に江戸の風湧く神楽坂
天を衝く凱歌西日の甲子園
秋近し流木に聴く濤の音

美らの浜 近藤徹平

夏の星語りは尽きぬ美らの浜
憲法の前文古色土用干
夏菊や五百羅漢を巡る径
露天湯に貧乏徳利夏の菊
三度目は霸王を地獄原爆忌

一筋の境 延昭

一筋の流れに見せて蟻の列
露天湯の満天にある夏の星
睡蓮の静寂に浮かぶ鯉の口
無人で点る崎の灯台夏果つる
勤行へいそぐ摺り足秋近し

薦 茂る 島津初花

仏具屋は町に一軒盆用意
盆用意色鮮やかな砂糖菓子
薦青し街道添ひの一軒家
薦茂る畔はそば屋の昼提灯
薦青し昔なつかし宝塚

雲の峰 鈴木康世

ささ漬 鳥羽和風

今日も又己と不仲極暑かな
三千歩今は五百歩雲の峰
余命まだあり九十四鰻食ぶ
夫の笑顔思ひ描きて泥鰯汁
終章は美しくありたし雲の峰

ささ漬に緑走れり竹の春
ささ漬を追うて一筆秋初
ささ漬の鮮度透けたる花芙蓉
ささ漬に松茸ほのと土瓶蒸し
零余子採り海の匂の小樽かな

百日紅 十倉和子

濯東綺譚 永野史代

百日紅掃いても掃いても巫女溜り
ひこばえに咲く百日紅健気よな
こぼれつぐ白さるすべり七七忌
堂庇白さるすべり暮れのこる
百日紅ハーン旧居に咲きつづく

文枕ふみまくらは「濯東綺譚」梅雨の入り
水に透く金魚たひらに掬はれて
金魚玉路地にさみしき男の子
匙なめて未だかき氷欲しき子よ
五円玉母にねだってかき氷

あづきアイス

町野 広子

打水

丸山 マスミ

棒アイス食べながら聞く子の話
女坂「あづきアイス」が溶けぬ間に
施主からの差入れレモンのかき氷
職人の三時にせんべい水羊羹
朝の勤行裏山滴れり

打水や好き風抜くる京町屋
打水や光も撒きて路地住まひ
身に入むや敦盛最期の須磨の海
睡蓮の池の静寂や雨意の風
石庭に波打つ白砂秋近し

夏 過 ぐ

松井 由紀子

言 葉 尻

茂木 和子

枇杷の実のつめたきを食む微熱の日
身に入むや独りの無事を問ひ問はれ
盆三日片寄せてある赤コーン
作り手の記名小さき大茄子
溶暗の沼ひつじ草しろじろと

軍艦に似し一棹の水羊羹
水羊羹つるりと母の言葉尻
頤に止まりし藪蚊取り逃す
身に入むや「おれおれ詐欺」の落し穴
雄鶏の向う見ずなり鳳仙花

夕 風 森 川 義 子

小船ゆく瀬戸の夕風穏やかに
夕風や瀬戸の小島の点点と
片蔭や葉書一枚ポストまで
肩幅ほどの片蔭をゆく登校児
屋上に場所を移せる花火かな

終 戦 日 森 本 早 苗

眼裏の父の背の泣く終戦日
長寿猫織女の元へ旅立ちぬ
ピッチャーの汗まみれなる盆の窪
接戦や団扇満開甲子園
白い腹見せて守宮の動かざる

大戸一丁目あたり 網 野 月 を

紫陽花やそのまま枯れて首切らる
夜の底につけるラジオや夏去りぬ
卑怯とは胸の痛さよかなかな蟬
自らの死因あれこれ夏の霜
野分の夜夢にうつつに雨の音

刻 刻 と 石 井 喜 恵

花氷開演ブザー五分前
追憶は佳き事のみを花氷
滴りに滴るまでの間合かな
刻刻と変はる山影滴れる
短夜の夢につづきのありさうな

今年竹 石山かつ子

星月夜 梅澤佐江

まかり出て土塊のごと墓
的は土器割れて盛夏のクレイ音
滴りやコップ置きある山仕事
黒文字を使ふ楽しさ水羊羹
花板の挨拶に来る作り滝

新涼やポニーテールの射貫く的
矢狭間を抜け来る風や秋涼し
爪紅の色を扨びて乙女めく
閑伽桶の水清らかに処暑の風
流麗な遺墨の文や星月夜

滴り 内田恵子

なむ熊蟬 大橋廸代

ソーダ水舌の青さを競ひ合ふ
頸伸ばし夕立眺むる我と馬
神の山鬼の山とも滴れり
滴りに強弱のあり行者径
野外劇のせりふ大声秋近し

潮満ちてさわだつ妹背山の蟬
蟬も来よ蒼き樹下にて水飲まむ
南^な無^む熊蟬翅でずに果つ螯
遥拝や青嶺に埋もる紀三井寺
定期券ひろふ風鈴棚の下

季音月

才女のかき氷

正木 萬蝶

打水や女将の恋の泣きどころ
かき氷くづしても崩しても才女
外つ国の友にジェラート銀の匙
鮮やかに紅型の舞ふ西日中
黒南風や琵琶湖疏水を逆撫です

秋に入る

河野 はるみ

隅田川右に片寄る花火船
水打ちて露地に昭和のにはひ立つ
水打ちて羽二重餅と珈琲と
芝居はねそぞろ歩くや秋初め
身に入むや母の形見の一つ紋

虫干し

大塚 茂子

虫干や二階日本間帯の川
虫干や着物に埋もれ母のこと
譲られし大歳時記を虫払
たとう紙をつぎつぎ拵げ土用干
夏菊や出棺に鳴るクラクション

竹屋の渡し

檜鼻 ことは

ドアフォンの音も乾きし極暑かな
ラジオより臨時のニュース日の盛り
母の字や納戸の奥の梅焼酎
耳遠き父は笑うて稲雀
あそこらが竹屋の渡し星祭

切れ味

青木 鶴城

炎天の海のどよめき艦棺
賑はひは祖先の供養夏座敷
親指で当たる研ぎ味夏の果
郷愁を時に預けてメロン切る
半切に下ろす一筆土用餅

壮年 日高道を

踰躍の水の色にも初秋かな
壮年やトマト嫌ひのトマト好き
壮年の秘めたる心花木槿
寒蟬や短き生を鳴き尽くす
一人旅鞆の中に秋扇

風通ふ 曲淵徹雄

床の間に白磁の菩薩夏座敷
風鈴や袋小路を通ふ風
一反に満たぬ棚田を青田風
夕顔や今宵一夜の月迎へ
西日受け石材店のゴジラ吠ゆ

盛夏 松宮保人

白蓮や無垢の世界の透き通る
掛け合うて泣き出すまでの水遊び
微酔へど我が家と分る夜干し梅
湯気立ちぬ舗装工事や夏旺ん
花火果て闇に無言の帰り道

秋半ば 池田雅夫

中庸の徳をそびらに秋半ば
長旅の脚の疲れも露の世ぞ
満月のふくみ笑ひにつられけり
長き夜をうつらうつらと看取妻
幽谷の天地渾沌霧襖

たまゆら 原田秀子

土用干しほのと母の香絵羽羽織
樟脳の香るかすかに土用干
くり返し夜想曲聴く初秋かな
七色の光とどめて芋の露
踰躍の苔に天与の光る露

蔦青し 飛永鼓

消えてなほ余韻の中の花火かな
味噌蔵は暗き所よ蔦覆ふ
家一つ蔦となりけり過疎の村
青蔦の光る葉先にたぢろげり
蔦青しかつて栄えし酒の蔵

豊の秋 原田自然

鳥羽谷を折半にして豊の秋
三羽来て五羽来て七羽稲雀
散り行くも五湖の色さす梅もみぢ
宿場町蔵を乗つ取る蔦紅葉
ボオンボンと夜長の時を刻みをり

蔵の町 松山清子

久久の小江戸の街の暑さかな
蔵町の二階より見る山車の列
四辻に山車出会ふ時埧塙なる
蔵町の菓子屋横丁大西日
蔵店の箱階段の夜の秋

遊女塚 荒井俱子

ゆつたりと座する大仏雲の峰
白百合やビルの狭間の遊女塚
寝ころぶは畳がよろし大昼寝
水打ちて我家に生氣呼び戻す
戌の刻波間に浮かぶ夜釣の灯

忘れ得ぬ祖母 松島寛久

忘れ得ぬ祖母の手と顔梅筵
おぼつかぬ馬鈴薯むく子のカレー食ぶ
どか弁に梅干とへしこ沖の漁夫
「何食べる」婆帰省子に顔くづす
トラクターの尻よりころころ馬鈴薯

かき氷 福田千春

練乳のとりみ懐かしかき氷
山の日の慰霊登山や秋の蟬
豊胸を隠しきれざるサンドレス
打水の黒塀盛り塩石畳
水打つて再会の友待ちにけり

夏休み 田中章嘉

夏休み人はそれぞれ旅景色
蓮の実の飛び立つまでの下準備
天の川の水被災地に届けたし
蛸や時の鐘にも負けず鳴き
川越の本丸御殿蟬が啼き

銀の匙

石川理恵

伸直りできて分け合ふ氷菓かな
氷水よりも冷えぬる銀の匙
かき氷話し足りない女たち
水を打つサンダルの指濡らしつつ
打水や土のにはひと日のかけら

アウトレット

野口和子

誇らしく騎馬上の父終戦日
空に遊ぶウサギやハート遠花火
懐かしき人らに会うる盆の道
戦場を語らぬ人や敗戦日
夕涼みアウトレットの人混みに

たらひ舟

保坂翔太

老鷺へ声帯模写で鳴き返す
虹立つや「佐渡情話」乗せたらひ舟
若竹や親を越えたる知恵の丈
さざ波が連れ来る小風夕風に
御神火の名残の山や夏の星

夕風の島

横山君夫

夕風の島の窯場の煙かな
青紫蘇をからりと揚げて抹茶塩
紫蘇を揉むピアノ弾く手を染めながら
お品書き終へて梅雨入の店開く
家宝などなくも露台や星を待つ

いびき

笹本啓子

青葉梟身繕ひして夜の森
豪快な小兵のいびき大昼寝
波音も楽と聞えし避暑の浜
身になじむ母の残せし藍浴衣
夕顔が咲けど今宵は独りきり

初螢

西浦千枝子

一つ家に終の栖に初螢
運転の心をほぐす初螢
宿題を山程ためて螢狩
真の闇螢もつとも飛ぶ気配
喪の家に明るさ戻る螢の夜

粹

石田慶子

夕立あとセピア色めく街を行く
頬杖付き金魚を愛づる母の午後
ポイ入れて金魚と吾の知能戦
夏シャツにカレーうどんの染み一つ
濃紺に粹の一文字夏のれん

夏 旺ん

葛城 千世子

バスを待つピンクシユーズの藍浴衣
夏旺ん引き潮岩に二羽の鳩
岩に立ちばたばた海鵜羽広げ
風鈴祭バスの割引パス失くす
一斉にそよぐ白蓮あしべ庵

秋 の 空

下川 光子

トンネルを抜けて高原秋の空
秋高し雌の後ろに雄の山羊
一筋の飛行機雲や秋隣
睡蓮や絵筆に墨をたつぷりと
ポストより湯気立ちさうな残暑かな

最近の 名句集を探る

座談会

大西 朋

田島健一

なつはづき

司会・筑紫磐井

◎好評連載

益岡菜穂『雨の器』
依光陽子『ふ、は鳥に』
板倉ケンタ『二花一虫』

◎巻頭三句

星野 椿／中村雅樹

遠藤由樹子／花谷 清

山下幸典／平賀節代

◎俳句と短歌の10作競読

古田 秀十／霧島茉莉

◎人と作品

曾根毅句集『十翼』

浅川芳直／仙田洋子

高野ムツオ／星野高士

◎LEONO 私の選読

殿村菟絲子

繪明子・和田順子

井上泰至

俳句小説・ウラヌスの蠟

橋本喜夫

写生はレトリック

伊野孝行

人はなぜ風景を
描くのか

小川 楓子

俳壇ランドスケープ

青木亮人

俳人の響き

大西 朋

俳句へのまなざし

藤村公洋

俳句のつまみ

神作研一

てのひらの江戸

古典籍を旅する

穂矢まりえ

諸家書架

石井隆司

たもとほる

俳句よもやま話

山本 潔

一望百里



2026年10月号

9月20日発売
定価1300円(税込)

<https://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

季音花

里心 越田栄子

夏椿いとしい人の文のごと
悠久の頁をめくる曝書かな
虫干や母の遺愛の五つ紋
味見にと貰ふ梅千里の味
夕焼やふつふつと湧く里心

夕星 染谷風子

夕顔や昭和演歌に「夜の蝶」
百疊に響く三味の音夏座敷
夕顔や葛屋の軒に投句箱
白扇に自慢の一句墨香る
夕星や胸に差し込む舞扇

処暑の雨 梅澤輝翠

風の盆胡弓におされ告白す
沖に出よ七夕流し竹の舟
砂浜を黒く濡らして処暑の雨
白粉花をさはさは揺らし漁師来る
白粉花夕餉を知らす母の声

夏の居残り 菅原卓郎

遠会釈かはす溽暑の交差点
炎昼の濠に気だるき鯉の口
読み解けば怖きグリムの書を曝す
水茶屋の褪せし幟や秋隣る
取的の減りし下駄の音夏終る

処暑 渋谷きいち

野菜の屑が山となりけり処暑の風
玄関が開きさらりと処暑の風
両親を乗せて傾く茄子の馬
闘病の録画ライブの秋祭
記録係もベンチで涙秋の雲

茄子の馬

新

曆文

大柄な兄二人乗る茄子の馬
大戦の記録映画や法師蟬
処暑の夜や妻の返事の気怠さよ
灯籠や逝きし友ゐる庭の影
灯籠や風の通ひし母の庭

信

濃

池田 珪子

小流れに板渡しありえごの花
一枝は水面に届きえごの花
水の音の静かな村の七変化
雲被るアルプス揺る植田かな
白馬岳やつと雲切れ夏燕

かき氷

清水 桂子

饒舌を聞き流しつつかき氷
タンデムを漕ぎゆく影や避暑の朝
夕顔に「おはよう」といふ散歩びと
夕顔や主なき家を灯しをり
文机を乙女チックに水中花

初秋風

岡本 祥子

揺れ動く初秋風の有るか無し
ひとすぢの秋の初風受けてをり
音もなく星飛ぶ夜の風の音
行き合ふや橋のたもとの花芙蓉
万年青の実庭を収めし重みかな

十勝岳滝壺

野村 美子

初恋の思ひ届かず水中花
水揚げの鯖身を卸す漁師めし
十勝岳滝壺青き眺めかな
岩魚追ふ秩父溪谷流し釣り
朝日浴びラベンダー畑丘の上

夕顔

菅原 真理

垣根這ふ夕顔の蔓ゆき先は
向日葵に花屋の主役とられけり
里帰り腕一杯の青田風
夕顔や一夜限りの白化粧
水中花命あるごと恋もして

水打つ 小林京子

顔寄せて線香花火を見届けぬ
逆縁の古き墓石や茄子の花
打水や甦りゆく黒御影
籐椅子の赤子の威厳長子かな
背伸びして七夕飾りまで届け

夏の盛り 岡田宣子

北国街道名残の松に大西日
青田中過る一両黄の電車
夕風やバランス保つ盪船
自販機の売切れ表示大暑かな
原宿をへそ出しルック夏旺ん

秋よ来よ 寺内洋子

送る魂またひとつ増ゆ八十路かな
まづ経をあげて始むる盆をどり
吊革が三角のバス雲の峰
仏手柑やあれが仏の手とはまあ
よき知らせ告ぐるかぼんと桔梗ひらく

水中花 野平美紗子

夕日差し輝く一瞬水中花
果たしたる親の役目や走馬灯
子の身丈標せし柱夏休み
狭庭なれども夕顔の咲く夕べかな
避暑先へ実家の兄の荷が届く

夏を満喫 山岸久美子

湧き起る雷雲みごと龍の舞
夏夜空満天の星降るほどに
時空を越ゆる永久の流れや那智の滝
寅さんの役者魂想ふ夏
夏祭り子供御輿の声高し

水菓 鈴木玲子

顔を寄すれば金魚ばくばく近づきぬ
縁日の肥えし金魚に名をつけり
ここぞとばかりに吸ひ寄せらるる水旗
アイスクリーム濃し牧牛の悠悠と
かき氷盛りて好奇の目の六つ

流れ星

西幅公子

振り向かず星飛ぶ海へ人魚姫
ゆつさゆさ風と笑ふや百日紅
凌霄の一樹丸呑み炎めく
すててこのホースの水が風を呼ぶ
月山の水を感じる新豆腐

夏きざす

森和子

びしょ濡れが嬉しき子等に夏きざす
夏めくや遙か秩父の空碧し
夏帽子ななめに被り美しき
口元の乳を吸ふやう昼寝の子
昼寝覚め元の余生に戻りけり

終戦日

宮崎チアキ

星涼し夫の一言思ひ出す
片陰や物価談議の盛り上る
戦争を語り継ぐ翁終戦日
隣人と交はす挨拶白粉花
「丸いよ」と注意する子や処暑の朝

平和

綿貫ひさの

黙々と競争もなき蟻の道
夏の空九回裏の逆転打
ご先祖へ謝意を表して盆用意
木偶が舞ふ浄瑠璃芝居秋の暮
コスモスや色交り合ひ美を増して

茄子の馬

霜多光代

藍染の暖簾あたらし処暑の風
料亭の盛塩光る処暑の風
手水舎の龍の水口処暑の風
立葵迷ひは飛ばし高くたかく
茄子の馬不如意な足の母を載せ

夏の夕

高橋満耶子

熊本城の石垣またも夏の夕
熱中症の警戒アラート鳴り止まぬ
甲子園の開会式や夏の夕
連日の酷暑と戦ふ球児達
関東に逆走台風上陸す

仙人掌の花

南條 きわゑ

十年も待ちし一夜の花仙人掌
折鶴を折りて祈るや原爆忌
長長と横たふ蛇や歩進めず
夏の日や車に残る犬吠ゆる
蝙蝠や我家の雨戸宿にせり

金魚

畑宮 栄子

鉢の中金魚すいすい何想ふ
独居老人話しかくるは金魚のみ
更地増へ街並みに沿ひ夏祭り
香水や好きと嫌ひは紙一重
香水の仄かにかをる老婦人

森英恵展

森下 美智枝

夕顔の白を極むる花三つ
百年の森英恵展風薫る
那須高原の友の別荘避暑気分
健診で身長減るや五月闇
「おばあちゃん」呼ぶことできた夏の果

昼寝

湯浅

和

がき大将昼寝の顔のあどけなし
静かなり昼寝タイムの保育園
お囃しの今が盛りや鰻料理
雲の峰帆柱きしむ船泊
アイスクリーム舐めつつ歩く若きペア

☆

☆

『水明誌』

を繙く

(水明七月号)

岡田美幸

(「コールサック句会」
「現代俳句協会青年部」所属)

境内の屋台解かれて花曇

森川義子

お祭りの最中ではなく、後の祭りの景に着目して詠んでいる。その寂しい景に着目する点に俳句らしいわびさびを感じる。そういった場面を見逃さずに一句にする観察眼も光る川沿いの屋台ではなく、境内である点も俳句らしい雰囲気づくりに一役買っている。

それだけではなく、花曇という晴れの場面ではなく曇りという微妙な季語との取り合わせも上級者感がある。祭りはハレの舞台と言うから、祭りの終わりと曇りという晴れでない天氣の季語との組み合わせは似合う。

その上、ただの曇りではなく「花曇」であることと、祭りの後という普通でない状態から通常に戻ろうとして「屋台解かれて」いるさまも似合う。

季語と景の取り合わせの成功だけではなく、この俳句に詠まれている光景が読者の脳裏に映像で思い浮かぶ点も、完成度が高いと感じた理由の一つである。

悪役に楽屋見舞の桜餅

染谷風子

悪役と桜餅の取り合わせにギャップがある。季語の持つ可愛いイメージが成功している。しかも、桜餅が妙に美味しそうだ。

この俳句の「悪役」は、芝居の上では悪役という憎まれ役ではあるが、楽屋見舞に桜餅が貰えるということは、芝居でない場面では人望があったり、先輩に可愛がられていたり、もしくは先輩として人気があるのではないか。要するに、悪役であるが役者個人としては愛されキャラだと思う。だからこそピンクの桜餅が似合う。

そしてどんな芝居の悪役かは分からないが、桜餅から察するに、時代劇や、歌舞伎など、和風の芝居なのではないだろうか。

この俳句が収録されていた連作に花まつりの句もあったため、花まつりの際に上演された出し物の芝居である可能性がある。まさかプロレスの悪役レスラーではあるまい。

句集喝采

菅原卓郎

◆山田貴世「草の花」

東京四季出版

著者略歴 昭和十六年静岡生れ。昭和四十三年「小鹿」入会。昭和五十三年「波」入会。昭和六十三年「波」編集長。平成二十八年「波」主宰就任。平成二十九年「俳句四季」特別賞受賞。現代俳句協会会員。

句集名はしっかりと根を張った草の花に感銘し自身も小さな花を付けた一本の草の花であるとの思いから命名。

そぞろ寒闇を溜めたる埴輪の目
躑くな若いつもりの春シヨール
いわばしる瀬音まみれの鮎の里
秋あかね夕べの空へ溶けゆけり

第一句、埴輪の大きな眼窩の奥に闇を溜め込んでいるとは面白い発想である。その間には埴輪の出自など色々な物語で一杯であろう。晩秋の季語がよく効いている。第三句、上五の措辞がこの句の眼目である。岩の上を勢いよく流れる水の中を縦横無尽に泳ぎまぐる鮎の動きが見事に捉えられる一句。

蹴躑く石も仏ぞ草紅葉
春隣り眠る海馬に喝入るる
湘南の空袈裟斬りに初燕
任侠の墓を守りて女郎蜘蛛
第二句、海馬は冬眠するのであるか。喝を入れて元に戻るかは甚だ疑問の残る処であろう。第三句、何ともすっきりとした切れのよい句である。初燕の俊敏な動きは「飛燕の早業」の言葉通りであり正に袈裟斬りを今にも仕掛けてきそう。掠め飛ぶ燕にはご用心ご用心。

◆曾根 毅「十翼」

東京四季出版

著者略歴 一九七四年香川県生れ。二〇〇二年「花曜」入会、鈴木六林男に師事。二〇〇六年「光芒」同人。二〇一一年「LOTTUS」同人。同年第二九回現代俳句協会新人佳作奨励賞受賞。二〇二〇年第八回俳句四季新人賞受賞。関西現代俳句協会副会長。

コロナ禍で外出自粛の状況を奇貨と捉えて作られた句を中心にした第二句集。句集名は易経の解説書の題名を拝借した。そうで易は芭蕉の「不易流行」に通ずる言葉と述べている。

己が葉の真ん中に死ぬ蓮かな
鶏頭のくの字の背中寂しけれ
毗の下がりゆくとき涅槃西風
行水の拭いきれない火照りかな

第一句、蓮の花は枯れても廻りの葉は従前どおり青々として何も変わらない。世の無常を痛切に感じさせる句である。第四句、夏場水を浴びると瞬間は清涼感が有るが暫くすると体の内部より何とも言えない熱気を感じる事が有る。それを拭いきれない火照りと言いつつ切った所に面白みを感じる。

小刀で削る疑似餌や夏の月
法隆寺いくたび月を遣り過ごし
一瞬の蝶の曳きたる無重力
水銀のなまぬるき日を菊臙
第二句、世界遺産である法隆寺の薨の上を月は何十万回通り過ぎて行ったのであろうか。古刹の時の流れを月に託した一句。第四句、水銀は零れれば球体になり瓶に入れば液状で重みを感じる元素である。その重みから何となく生温るく思える。それを吹き飛ばすのがさっぱりとした菊臙なのである。

現代俳句鑑賞

網野月を

月を抱きくらげ此岸の花となり

鳥居真里子

〔俳句四季〕 7月号・巻頭句より

月光を孕んだ海月の美しさを現の「花」と言っているのがある。叙景句の体を成しているものの、表現の心の態は叙景句のそれとは異なるのである。上五の「月」にある種の神秘を盛り込んでいるからであろう。

雲に罇 大きく麦藁の匂ふ

阪西敦子

〔俳句四季〕 7月号・巻頭句より

中七の「大きく」は「罇」の大きさを言っているし、また「匂ふ」に副詞的用法として掛かっている。副詞として機能しているように解釈できるのである。「麦藁の匂い」について、生活や農事での「麦藁」の機能性を考え合わせると、この句が初夏の快い一日を描出していることに気付くのである。

石鹼玉ひとりも人が死なない日

加那屋こあ

〔俳句四季〕 7月号・四季新人賞より

人の世の現実を表現しながら、何とも恐ろしくもあり願いたいのか現実にはあり得ないことをも表現しているのである。

人生を全うできない死をこの世から失くしたい願いが込められている。「石鹼玉」の美しさと儚さが句全体を支配している。他に「白息のキリエ梢はふれ合わず」がある。

口笛のこの世では猫ふりむかせ

山田耕司

〔俳句四季〕 桐生で暮らすより

肯定の体を有する断定の叙法である。ということは「この世」ではなくて、何処なら猫は振り向かせることが出来ないのであろうか？と問い詰めたくなる。そして気が付くのである。あの世では猫は振り向かないとは決して言っていないというところに。そして「この世」でも必ずと入っていないのであることに。

風を抱き風を離るる尾白鷺

高橋将夫

〔俳句四季〕 7月号・槐より

「尾白鷺」の本質を的確にとらえながら、優雅な飛翔ぶりを大きく描出している。「尾白鷺」が風を把握する様子を「風を抱き」と言い、また「尾白鷺」が風の力に逆らう様子を言いながら、「尾白鷺」の風と共存する生態を余すことなく表現している。

明易や猿が進化を信じてても

松田ひろむ

〔俳句四季〕7月号・山脈より〕

この句は、人間界のみならず様々な生物界の命題が示されている示唆の多い句である。作者は「明易」に目覚めて、ふと思いついたのである。そもそも今更、猿は人間には進化しないのである。ただ別の形で進化はありうるようにも思うのである。他に「楸邨山脈三合目にて汗を拭く」がある。

庭石の貌見えてくる緑雨かな

西山 睦

〔俳壇〕7月号・ライムの花より〕

「緑雨」に洗われて、「庭石の貌」、つまり石相が判然としてきた、というのである。晴れの日の石相と、雨の日の岩相の色々は、周りに植栽されている木木の色艶と相俟って、千変万幻するもので、この句でいう「貌」は正しく作者の好みの色艶になったと言うことなのではないだろうか。作者はこの庭の「緑雨」の風情が好みなのである。他に「ライムの花くぐり青年現るる」がある。

雨の輪の下に水澄む夏隣

村上 軻彦

〔俳壇〕7月号・石頭より〕

座五の季語「夏隣」がこの句の主要な季語であると鑑賞した。「水澄む」のは何も秋季だけではないのである。「雨の輪の下に」こそ、作者は「水澄む」という実態を見つけ出したのである。祈りにも似た願望を感じずにはいられない。他に「藤房をくぐつてきたる石頭」がある。

牛乳を桜の昏さかと想ふ
待つやうに海を見てゐるサングラス
戦争を待つてるやうな青バナナ
ほろ苦きバザリーニ忌の乾葡萄
朝まだき青女に抱かれ発熱す

〔句集「星暦」より〕

山本左門

句集『星暦』は作者の第五句集である。十年分ほどの句を収録している。全体は春季・夏季・秋季・冬季に編されている。第一句目は「牛乳」と「桜」の色合いを単に比べているわけではない。それぞれの質感と作者ご自身との関係性において、「牛乳」よりも「桜」の方が明るいと感じ入っているのである。想像するに「桜」を見て作句したものに違いない。第二句目は、作者ご自身を「サングラス」で指示しているようにも考えられるが、第三者の様子を描写したもののようには鑑賞した。それでも上五の「待つやうに」はご自身の心象を反映しているように鑑賞できる。第三句目は句集の中で筆者が最も衝撃を受けた句の一つである。季語「バナナ」の使用については俳句における歴史的経緯があり、つまり植民地時代との関係性もあつて上五の「戦争を」と深く結びついているように感じられる。現代の不穏な雰囲気表現としてと解釈した。第四句目は、去年バザリーニの五十年忌がありそれに因んだ句であろうと解釈した。彼の謎の死因などを考え合わせると座五の季語「乾葡萄」に納得がゆくのである。第五句目は、まだ朝が明けきらない時分に「青女に抱かれ」というのである。余りに大胆な比喩である。筆者は、句集の最後を飾るこの句を読んで、第六句集を予感するのである。

私の三句

保坂翔太

黒南風や朽ち行く沖の軍艦島

長崎市の長崎港から船で四十分程の沖合にある端島は、海底に石炭が埋まっていることが発見され、一八九〇年（明治二三年）に本格的な採掘が始まりました。明治時代から昭和時代にかけて海底炭鉱によって栄え、日本軍が一九二〇年（大正九年）に建造した軍艦「土佐」に似ていることから「軍艦島」と呼ばれるようになりました。

長さ四八〇メートル、幅一六〇メートル程の小島に、一九六〇年（昭和三五年）頃的最盛期には約五三〇〇人もの人々が暮らし、人口密度は世界一だったそうです。主なエネルギーが石炭から石油へと移り変わったことをきっかけに、一九七四年（昭和四九年）に約八四年間の歴史を閉じ、無人島となりましたが、二〇一五年（平成二七年）には「明治日本産業革命遺産」の構成資産の一つとして世界文化遺産に登録されています。

この小さな島に上陸した日が小雨でしたので、殊更、最初の鉄筋コンクリート造の高層集合住宅等が朽ち果てつつある姿を目の当たりにして、文明の終焉を見る思いがしました。

金色夜叉の浜辺を漫步良夜かな

かつて、会社の一泊旅行といえ、多くは熱海でした。浴衣姿に下駄履きで海岸沿いを雑談しながら漫ろ歩きを楽しんだものです。以後、すたれ気味であった熱海が、近年は外国人観光客の増加と相まって、人気の温泉地へと復活しました。熱海と言えば、尾崎紅葉の小説「金色夜叉」の「貫一・お宮の像」「お宮の松」が海岸の国道沿いにあり、知名度が高いこともあり、多くの人々が訪れています。

高崎線の東京上野ラインでは、熱海への直通電車の本数も多く、新幹線に乗らずとも熱海に行くのが便利になりました。

鏡台の吾の白髯や秋の風

近眼かつ老眼の私は、昨年、白内障の手術をしたことにより、家の中の生活は、眼鏡を掛けずに本を読み、テレビを見、パソコンの入力ができるようになりました。

鏡に写った自分の顔も髯も良く見えるようになりました。たまたま座った妻の鏡台に写った自分の顔は、白髯が多いことやシミが目立つことに驚きました。

ともあれ、白内障の手術のお蔭で、世の中が明るくなったように感じ、秋風の心地よさを感じつつも、随分と齢を重ねたことをも思い知らされました。

私の三句

横山 君夫

志士たちの馳せし道なり藪柑子

萩往還、これは江戸時代に整備された街道の一つ。現在の山口県萩市と防府市とを結ぶ古道である。幕末には吉田松陰や木戸孝允、高杉晋作、伊藤博文など維新の志士たちが何度も往き来し、歴史上重要な役割を果たした道である。

この句では、今も幕末の志士たちの息遣いが感じられる道と、道端で小さな赤い実を付けている藪柑子のひとつりとした佇まいを重ねた。

「馳せし道なり」には、志士たちがこの道を、強い志と切迫感を抱き、駆け、奔走した道であるという思いを込めた。藪柑子の赤い実も、志士たちの情熱や命の名残を連想させてくれる。

渡月橋わたりきる間の時雨かな

京都には、四季折々の風物詩がある。春の桜、夏の祇園祭や鴨川の納涼床、秋の紅葉、冬の寺社の雪化粧に加え、北山時雨も風物詩の一つになっている。

かつて京都の旅で、竹林の小径から天龍寺へ入り、曹源池

庭園と精進料理を楽しんだ後、嵐山方面へ向かう途中で通り雨にあった。これが北山時雨かと思ったが、北山時雨は京都の北山方面から来る時雨を言うらしい。時雨は、初冬の頃にさっと降ってはさっと上がる雨。

この句は、渡月橋の渡り始めは、雨に包まれていたが、渡りきる頃には、雨が止み明るさが戻っていたという、そんな時雨の移ろい易さと、つかの間の趣を詠んだつもりである。

船窓の丸き夕空雁帰る

日本には鴨、雁、白鳥、鶴などの鳥たちが、秋に北方から渡ってきて、列島で冬を過ごし、春には北へと帰って行く。

この句では、新潟港から佐渡への途中、フェリーの丸い窓から見た美しい夕空と、北帰行の雁の姿を重ねた。

「丸き夕空」は、船の丸い窓越しに見た、切り取られた夕空である。その夕空の真ん中を雁が、V字編隊で北を目指す景色は、小さな一幅の絵のようであった。

また、雁たちが省エネに適したV字編隊で数千キロメートルも先の北へ帰っていく姿には、その驚くべき知恵や協調性、連帯の強さを感じ、深く心を動かされた。

私の三句

笹本啓子

泣き顔になりさう盆の雪兎

久しぶりの大雪の後、子供達は雪達磨作りに興じていた。私も家に戻り、盆の上に可愛い雪兎を作りました。しばらくすると、その雪兎は溶け出して、顔がまるで泣き出しそうに見えました。その時の一句です。

若芝を踏めば足裏に地の息吹

私の家の近くに小さな公園があります。そこには芝生があつて、毎年春になると、又芽が出揃います。その中にそつと足を乗せて見ると柔らかく、足の裏に地の息吹を感じました。その柔らかい芝生に寝転んで見たい衝動にかられました。この句は地の息吹を感じた時の一句です。

郭公の声後先に札所道

健脚なころ秩父三十四観音札所巡りを、満願したいと始めました。秩父巡礼は、一番、四萬部寺から、三十四番、水潜寺まで、山あり谷あり、美しい自然の道のりです。中でも二十三番札所、音楽寺までの山道は、郭公の声に励まされながら辿りつき、お接待のお茶に喉を潤し、この札所巡りは二年をかけて、無事三十四番札所、水潜寺に杖を納め満願する事が出来ました。郭公の兼題が出た時に、苦しくも楽しかった札所巡りを、思い出して詠みました。

山本鬼之介 選

水明集

さいたま 本橋稀香

青嵐葉裏見せ合ふ庭の木木
雨脚は生絹のひかり立葵
夫のものみな愛しきや更衣
少年を軽くいなして蜥蜴消ゆ
汗しとど朝靄を突く調教馬

点字ブロックを採る白杖梅雨晴間
露台へと登りくるかなアンタレス
パラボラを着ける露台で余所見する
感情が顔に出てゐる西瓜割
若竹やふはりふはりと衣脱ぐ

飯田忠男

大西日照らす航跡金波散る
雲の峰谷を挟みて背比べ

大西日真つ赤に染まる操車場
山小屋を橙色に染むる陽や
水煙を射る西日碎けて光散る

そそくさと尾切れ蜥蜴が白日を
きやうだいで揉むる金魚の名付けかな
半夏生あわてて捲るカレンダー
退院の体幹しかと夏木立
ボサノバのリズム誘ふ夏の風

平塚 丸屋詠子

利根 倉田星歩

籐椅子やセピアに染まる写真館
深海へいざなふ八つの籐寝椅子
鼻腔より巡る総身新茶汲み
旭光が青葉の谷を造りけり
紫陽花や毎度間違ふ合言葉

さいたま 皆川更穂

草むらの気象予報士雨蛙
五月富士裾をくすぐる新幹線
快晴や車窓食み出す五月富士
蜻蛉生る三次元への大飛躍
半夏生一転晴るる誕生日

反町 修

短夜のサナトリウムに煙草の火

天と地を分かつ五合目夏の富士

南風やバターの溶くるティールーム

睡蓮に寄り添ふ鯉の泡一つ

夕風やびたりと止むる能の足袋

さいたま 綿引まりこ

老鶯や山門までのゆるき坂

老鶯の守る山辺の古墓石

梅雨晴や左官二人の身の熟し

潮の香の奄美恋しき夏至の昼

向日葵の黄は屈託を払ひけり

さいたま 内田 章子

羅や通りすがりの白檀香

五月雨や緑にけぶる歩道橋

老鶯や山の暮らしの声の張り

鯨食ぶ老舗の護る沼畔

白玉のつるんと笑窪湯気の中

寺町 知子

五月雨の両国を行く色和傘

酪農家目指す少女の首の汗

月涼し夢二の女首やはし

発車メロディーアトムのホーム風薫る

風青し今日の干物の尾の立てり

田中 弘子

羽蟻来て机辺に騒ぐ雨上がり

炎日や油井に上る地の憤怒

若竹や孫が乗り継ぐトラクター

裏山に時を刻めり今年竹

我がトマト無骨に丸く青くさく

越谷 阿部 幸代

父祖の地に縁を訪ね青田中

青田波なびかせ赤き郵便車

白南風やタンカーそろと接岸す

洗鯉街に火照りの残る宵

香水の遅れてかをる夜会巻

上尾 室井早都子

傾城のごと一瞥や蜥蜴去ぬ

夏フェスティバル調律の音は山麓へ

温もりに倦むや乙女は蜥蜴愛づ

六月花嫁白無垢なんの色に染む

祭笛調子外れに父想ふ

吉川 杉浦 千祐

噴口のお遍路さらふ雲の峰

西日受け縛られ地蔵の縄ごろも

もくもくと霜のグラスを雲の峰

実母かな日傘傾げて擦れ違ふ

大西日パンダのぬない動物園

さいたま 森下 山菜

白南風や荒磯に確と朱の鳥居

さいたま

石黒由美子

白南風や瀬戸の橋行くツーリング

呉須に載り笹の粧ひ洗鯉

坪庭へ風入る夕べ夏料理

蹲に四葩を添へて客迎ふ

香水の香闊歩するやパリ―祭

さいたま

秋谷風舎

走馬燈男気付けば髪白し

初めての我が家の花壇茄子の花

厨房の壁がベッドや守宮寝る

出目金と玻璃ごしにふと眼の合ひぬ

羽島秀子

冷汁と五目鮓ある古稀祝

川島夕峰

南風に阿吽のシーサー対峙せり

秒針のわづかな狂ひ我鬼忌かな

ピノキオの鼻のうごめく我鬼忌かな

香水を耳たぶに決め告白す

合はせ漕ぐ息の荒さや舟遊び

沈黙の二人や白き水芭蕉

緋目高のかすかに流れ影三つ

石関六弦

五月雨やシート敷かるる野球場

平野 楽

成りゆきをいつも見てゐる目高かな

看板の錆の光や夏至の街

ただ座る伽藍に風や夏薊

梅雨晴の朝に綺麗な目玉焼

五月雨の池に残せし水輪かな

大 阪

遠藤人美

出産に立ち会ふ婿に玉の汗

元田 亮一

丸き背に鳴海絞りの浴衣かな

あの子女が母となる夕合歓の花

明易し女系と言はれ顎撫つる

でかしたと冷酒で祝ふ夏の朝

婆となり艶取り戻す夏野菜

夏草の奥に隠るる鳩の国

さいたま

大泣きの稚の声止み夏の月

がらがらの喫茶の席や沖縄忌
大瓶の牛乳シェイク沖縄忌
豆二粒残して長居沖縄忌
哲学書置くだけで飲む沖縄忌
早退にくつろぐ喫茶沖縄忌

さいたま 吉川拓真

一切の命預くる夏野原
初デート色鮮やかにソーダ水
七夕や玉手箱から出る言葉
花火揚ぐかつて爆弾降りし空
沖縄のガマの語り部夏の草

若狭 松村笑風

父の日を祝ひ娘が一升瓶
父の日や庭で空咳聞こえさう
五月闇五百羅漢を一周す
愛猫の心音消えて五月闇
醉漢が鍵穴探る五月闇

北出久美子

夏立つや「冷」の字揺るる麺処
尾根道や斜面転がる夏帽子
草茂る行方を標す赤テープ
雑踏や手を離すまじ花火の夜
人が無く風も無き村土用昼

畠中風花

持て余すお礼返し夏蜜柑
子の三疊間主顔して熱帯魚
恋焦がれ不器用な手でレース編む
草の根を抜いて蟻塚木つ端微塵
畑仕事わが足を噛むはぐれ蟻

竹澤和子

独り居の部屋の広さや昼寝寛
厚き本風がめくりて昼寝かな
鳳蝶ふはり手水の花を追ふ
鳳蝶参道に風吹き抜けて
しばらくは虚空さまよふ昼寝かな

さいたま 持谷寿夫

薫風や海を背中に人魚の像
草茂る初球いきなりホームラン
この家を継ぐ人をらず草茂る
お囃しの遙かに聞こゆ夏座敷
浜茶屋の準備急かする海開き

若狭 山崎郁子

若竹の硬き袴の脱ぎきらず
若竹や葉音降りくる朝の径
水船に右往左往の目高かな
父の日の紙のメダルのひるがへり
黒南風や湧き上ぐる墨色の雲

阿部貞代

古民家の漆引き戸や茄子の花
筆簾のたゆたふ宵や走馬灯
花柄のサマードレスと決むる朝
緑陰の濃きをたどるや乳母車
湯煙の鏡の奥や髪洗ふ

さいたま 石井直子

五月雨やしづく揃はず花の上
梅雨のてふ草に休めば草となり
五月雨や知らぬ顔して蔓の這ふ
五月雨の夕明るみて木の香濃し
木下閤故郷の名得て北の土地

さいたま 清山尚己

日輪のじりじり燃えて梅を干す
サーフィンにその身躍らす土用波
花火果て人の波果て戻る闇
色と音秒差で届く遠花火
風鈴の好きな風吹く軒端かな

若狭 森下風湖

作務衣着て寝転ぶ夫や青簾
走馬灯膝に纏はる老いの猫
走馬灯従妹手を引く孫二人
学童の耕す畑茄子の花
菜園に緑のベンチ茄子の花

三浦真由美

夏山に絆深めてクラス会
夏草や三日掛かりの戦跡
初夕立里の一部に陽の名残り
電柱に自立の術を鴉の子
継目無き空輝かす夏の星

西川 夕月

薄れゆく母の面影水芭蕉
輕鳧の子や身を寄せあひて用水路
水紋を大きく残し発つ白鷺
大鉢を我がもの顔の黒出目金
百合園を巡りて香りおみやげに

和歌山 嶋田洋子

十葉の埋め尽くしたる門扉かな
童らの指の先なる立葵
立葵祭の終はるごとく散る
えこの花散りゆく影の淡きかな
えこの花別るる時や秘めやかに

金沢 小島つぶ金

走馬灯解く記憶の無音かな
走馬灯少女期手繰る白寿かな
亡き母に余生無かりき走馬灯
足るを知るやりくり上手茄子の花
反芻の母の言ひ付け茄子の花

さいたま 木谷葉子

相棒の金魚と語る金曜日

海峡を鎮めて蒼き南風

大瑠璃や梢の天を欲しいまま

ミニマムに暮らし舞ひ込む黄金虫

山鉦の稚児神にする顔師かな

バス来るもその場釘付け熱帯魚

折り合はぬ皐月の雨の陶器市

レース装ひ箏と煙の饗宴に

朝市のフルーツ目指し蟻来る

昼寝時置き忘れたるチョコに蟻

ぼつてりと梔子の花闇の濃し

花嫁は梔子の花綿帽子

神の手なるアシンメトリー梅雨に入る

山滴り開くる楳円の曲げわっぱ

鋭角に梅雨空を刺すスカイツリー

バードデー空に響くは吾子の声

形かへ雲流れゆく愛鳥日

ひとり居の焼き蚕豆の旨きこと

すかすかの空豆ばかり引当てり

気分屋の義姉にお世辞や夏はじめ

さいたま 稲野幸子

小川 洋子

東京 山中いちい

川 口 新井のり子

気味悪き守宮張りつく硝子窓

土用入食欲そそる旗の揺れ

遠来の子に手料理を燕の子

三姉妹リボンたがへて夏帽子

鈴蘭にピンクもあると知りたる日

幼子のポニーテールに夏帽子

顎紐をきりと結ぶ夏帽子

鈴蘭や身の内に毒抱いて咲く

庭にゐてふと鈴蘭に幸折る

キッチン窓に溢るる新緑や

夏野菜料理得意は過去の人

夏帽子母の手を引き一回り

夏帽子目深にかぶり買物に

水無月や無理は言はぬと決めた朝

鈴蘭や家族の声の戻る午後

紫陽花のきらめく虹や夢光る

紫陽花に重ねし団欒物語

紫陽花や彩り豊か人恋し

紫陽花に雫滴る手毬かな

紫陽花や鬱吹き飛ばし虹色に

川 口 木村小麦

加藤みち

澤田たみい

さいたま 榎本道代

更衣教室眩しき一限目

更衣捨てよか着よか迷ひけり

八重戯菜妖精のやう白き花

十薬の白き十字花夕間暮

音感の狂ふさみしさ巴里祭

老いの背の斑点増ゆやてんと虫

梅雨穴やオイル長者の夢見たり

押入れの隅でしよんぼり夏衣

父の日や書斎にぼつんと丸眼鏡

大驟雨直路に軒のなかりけり

磯遊び湘南道路渋滞す

母老いて兄弟六人ソーダ水

ベランダに鳥集まる夏夕焼

夏の雷古事記初版本を読む

天牛に石段続く縁切寺

立葵白きシートぴんと干す

どくだみの匂ひ満ちたる雨あがり

万緑やパイプオルガンバツハ聴く

葉に隠れ静かに育つ青き柿

夏の空ヨセミテの壁挑む影

さいたま 田口 文子

太田 貴

山下ユリ子

三浦 玲子

待望の庭の振花ねぢれなし

ボール蹴る子らも一目「ねちばなだ」

振花の螺旋駆け抜け風の行く

沐浴の後の添寝や天瓜粉

天瓜粉ぼんぼんぼんや夢時間

いつ貰ひしや小箱の中の香袋

話し下手な女を前に夏点前

ひなつばめ餌貰ひてはばたと

ルーティンは巣への巡回父つばめ

五月雨や暗渠となりし川の上

額の花作業場跡につと咲きぬ

同胞と母の自慢や茄子の花

紫の葉陰にしかと茄子の花

走馬燈青い目の弾く津軽三味

走馬燈ゆるり雨傘廻しけり

水たまり小さな夏を映しをり

薄暑光パン屋にのたり子熊かな

パン食べてごろり昼寝の子熊かな

夕焼雲目元やはらか弟送る

空蟬や空映したる乾きし目

さいたま 緒方みき子

横浜 石井 妙子

さいたま 今西 操

伊藤美津子

逆転負け呻る麦酒のほろ苦さ
お水屋の水清くして茅の輪かな
守宮ゐて家のひつそり静かなる
楊梅の採る人もなく熟れ落ちて
巴里祭いつか瑠璃色となるセーヌ

さいたま 小山あつ子

青本を枕に寝むる土用かな
軒の灯に守宮べつたり影となる
覚え書ペン進まざる土用かな
絶食の腑に染み渡る麦湯かな
夏の夜のゴールにささる星の数

さいたま 篠原さよ子

ガウデイのイエスの塔や大南風
南風の夜カプセル放つ珊瑚礁
ひらひらと金魚に猫の大あくび
蓮池に静けさ破る応援歌
応援の声聞く新種の花菖蒲

樋口元美

甲斐の国風の渡りて青葡萄
梅雨冷えの土間の暗がり水の甕
水甕の木蓋の湿り梅雨の朝
蔵の扉は観音開き梅雨の雷
銭湯の瓶牛乳や梅雨の月

小野町子

南吹くマドラス風のカー屋へ
南風や人魚の涙探す浜
島の南風甘き果実の香と湿度
琉金の尾ひれふはりとフラダンス
金魚二匹仲良くもなく三年目

横山礼子

秋の海深く沈みて恋ごろ
山地より天然水や今年酒
金の粒拝みて洗ふ今年米
人生の御数になりぬ涼新た
秋めきてしぶきが踊る小舟かな

所沢 関根千恵

折りかけの飛行機残し夏の雲
蝙蝠や子等の家路に急降下
仲見世に青き浴衣の異邦人
滴りの奥に無限の地中水
過ぎ去りし岩場の淵に晩夏光

播磨 進

紫陽花の隙間に透ける偽の糸
お別れの会に逸話や五月雨るる
夏至の朝鴉早目の出番かな
荒れ梅雨の神の石段進む
梅雨荒れて虫の避難所石灯籠

さいたま 鈴木藻好

隣人や日傘をさして慎ましく

夜濯の肌着美し水清し

乙女らの原色似合ふ海水着

能登の海夜釣の人の中に友

夏風邪やテレビ観ながらうとうと

大阪 海老名ノルン

さいたま 武田重子

銀巴里や青春遙か夏の果て

ラムネ飲み弾くる恋の儚さよ

草むしり隣のママに手が触れて

甚兵衛をまとひて馴染み酒場かな

収集車囀も拾ふ夏の路地

さいたま 森田克己

大阪 飯塚智恵子

老の手の揉み出す新茶針となる

沸かして移し冷まして淹るる新茶かな

神木越しに富士滲みたる薄暑かな

黒南風や物の怪どもも身を屈め

父の日やシベリアの地図指で追ふ

小山泰生

草加 持永喜夫

父だけは頑固一徹塩トマト

鬱陶し梅雨明けて今日梅雨恋し

百トンのトマト投げ合ふそれも良し

下手なりに作句励まん零余子忌

ゆつくりとあぢさみ愛でつ妹の逝く

駒谷行雄

さいたま 関久美子

いつの間に柿の花から実の形
踏み散らす道あちこちに柿の花

梅雨明やしばし眺むる空の青

梅雨明や気持晴ればお買物

医者止むる氷菓を口にご満悦

炎昼や日傘にしたきモンステラ

梅雨の雷猫はちべえのお宿かな

梔子のぬらぬら匂ふ夜の雨

ゲリラ豪雨デートは中止牛蛙

風鈴や選ぶる風の音色かな

青き夜や素肌にまとふシトラス香

パルファムや熱き夜に干すマオタイ酒

カウンター端に留まる河童忌よ

カウンターグラスの露や河童の忌

十間川河童忌の灯の揺るる暮れ

亡き母の好みし色や茄子の花

走馬燈犬の命の駆け抜くる

ほの甘き夫の作りし梅酒かな

儚くも気高き使者や沙羅の花

濃き枝と実に添ひ淡き茄子の花

アロマ焚く南風はえを感じてひとりの夜
みなみかぜ

東京 中村まどか

さいたま 門真宏治

枝豆の毛羽立ち塩で揉みにけり

食べて寝て普通に出来ず六月病

水無月の三角形私への通信簿

柿の花並べて子らのおままごと

柿の花こぼるままの里の家

父の日の脳トレパズル四苦八苦

新聞で叩きて蠅と鬼ごっこ

小蠅来る果物好きは吾も同じ

さいたま 菅原靖子

三森恵子

ねぢれ花遊び疲れし手の中に

古戦場今はしづかにねぢれ花

ひとりつ子旅立ちたくてねぢれ花

天花粉三頭身は機嫌良し

信玄の湯屋に持ち込み天瓜粉

所沢 飯室夏江

東京 清水美千子

達磨さんがころんだ蜥蜴の逃げ足

生きたため再生可能な蜥蜴の尾

ウイスキーに青梅浸し待て一年

刻一刻猛暑を超えて酷暑来る

三郷 戒能邦人

さいたま 長谷川おにこ

良き土に良き茄子の花 茄子の花

平凡な日日のありやう 茄子の花

父の手に引かれし夢や走馬灯

長生きし我こそアンカー走馬灯

午睡覚めゆるるカーテン光さす

赤立葵高く高きへまつすぐに

青梅と氷砂糖の瓶ねむり

サングラス景色新たな街を行く

白南風や海へと銀輪猛ダッシュ

白南風や建具入れ替へ京町家

夫逝きてつのる恋しさ日日花

街角ピアノ弾く白服の洒落お爺

時の日の愛鳥首かしげ眠る

首里の城梯梧の花が咲いてをり

五月雨や晴雨兼用傘奔走

遊蝶花君も中間管理職

昔日や陽の匂するトマト食み
紫陽花や昔日の友訪ね来し

美輪明宏初夏永訣の「ありがとう」
夫癒えて暮し穏やか半夏生

包装紙ばりばり破く酷暑の日
窓開けて口の体操夏の朝

梅雨の旅砂丘と暗い日本海
猛暑日や相手あつての口喧嘩

宮代 関谷多美子

藤沢 小島喜代子

☆

☆

特集 秋の野鳥歳時記

巻頭作品10句

二ノ宮一雄・山田貴世・染谷秀雄

宮谷昌代・花谷清・井上論天

古賀しづれ・原朝子

俳壇

10月号

9月14日発売
定価1000円(税込)

巻頭エッセイ
朝妻 力

八木健選 滑稽俳壇

四季巡詠33句【第Ⅴ期】……岩岡中正・辰巳奈優美

リレー連載

没後50年の俳人たち(後藤夜半)……西村麒麟

新連載

大野林火ノートから……太田土男

風の旋律……西村和子

セピア写真館……南うみを

編集室の風景……燎俳句会

いま、気になる俳句の言葉……井上泰至

「名句DE動画」の世界……蜂谷一人

季語を考える……仁平勝

二度目の俳句入門……長谷川 權

今月の句……ふよう俳句会

俳句と随想12か月 波戸岡 旭・吉田千嘉子

本阿弥書店

〒101-0064

東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 電話03 (3294) 7068 振替00100-5-164430

作品鑑賞

山本鬼之介

雨脚は生絹のひかり立葵 本橋稀香

生絹は、練りを施さない絹の布地であるから、絹糸本来の自然の光沢を持っている。今、作者の眼前にある立葵に降り注いでいる雨は、生糸のように繊細ではあるが弱々しいものではなく、確りとその存在感を示している。このような微妙な雰囲気や文字で顯すのは甚だ難しいが、「生絹のひかり」によって見事にそれを成し遂げている。作者の技量に惜しみない賛辞を贈る作品である。

露台へと登りくるかなアンタレス 飯田忠男

夏の宵に南天に現れる蠟座の主星アンタレスを実に躍動的に詠んでいる。夏の一夜、バルコニーに立って夜空を観察していると、待っていたアンタレスが現れた。恰も作者の居る場所へ階段を上ってやって来たかのようにであった。作者の嬉しそうな顔が浮かんでくる作品である。

雲の峰谷を挟みて背比べ 倉田星歩

山と山の間に深い溪谷がある美しい景観である。その溪谷を挟んで、もくもくと盛り上がった二本の入道雲が対峙している。相手より少しでも高く見せようと懸命に背伸びする子供のような峰雲である。

ボサノバのリズム誘ふ夏の風 丸屋詠子

ボサノバ=Bossa Nova (Bossa Nova) の直訳は「新しい感覚」で、一九五〇年代後半にブラジルのリオデジャネイロで生まれた音楽である。広辞苑では「新しい感覚のサンバ」と、分かり易く解説しているが、詳しくは、「サンバをベースにしてアメリカのモダンジャズのハーモニーなどを取り入れて作られた新しいジャンルの音楽」ということになるようだ。こうした説明を頭に入れて本句を読み返すと、夏の風は、あの軽快で躍動感のあるサンバのリズムをベースにしたしつとり感のあるリズムを運んでくる風ということになる。海を見渡す窓辺で、ボサノバの歌を口遊んでいるのであるうか。

深海へいざなふ八つの籐寢椅子 皆川更穂

天然素材の籐を編んで作られた清涼感満点の籐寢椅子。一般的には、身体を伸ばして眠れるリクライニングチェア式

の籐椅子のことを言うのであろうが、ベッド式の籐寝椅子もその範疇に含まれるのではなからうか。浦和区岸町四丁目の高砂小学校の前にある籐製品の専門店で、後者の感触を試した時の印象が、筆者の脳裏に焼き付いている。

さて、熱帯夜を籐寝椅子で過ごす気分は如何なるものであろうか。筆者はまったく未経験であるが、想像するに、さぞや快適であろうと思う。しかし、この句の「深海へいざなふ」の措辞が恐ろしげなものを感じさせる。音のない真つ暗な深海へ引き込まれてゆく恐怖が、俗に丑三つ時と言われる八つ〓午前二時の時間によって示されているように思える。籐寝椅子と深海の二つの言葉が織り成す真逆の雰囲気がこの句の狙いなのかと思うが如何であらうか。

草むらの気象予報士雨蛙 反町 修

木の葉や草の上に棲み、葉や草の上では緑色、木の幹や地面では灰褐色に変わる保護色を呈する。梅雨期などに雨が近付いたり降り出したりすると大きな声で鳴き出す習性があるので、まさに自然界の気象予報士である。

夕風やびたりと止むる能の足袋 綿引まりこ

あの緩やかな能の動きの中に、一つ一つ決めの所作があつて芸が活きるのだと思うし、当然のこと足捌きも重要ポイントであらう。決められた動作で決められた位置でびたりと止

める足。作者は、足ではなく足袋と書くことによって、より印象深く能楽師の足運びを表現したのだと思う。突然止んで時が経つとまた風が吹き始める夕風に能を重ねたのが好い。

老鷺や山の暮らしの声の張り 寺町 知子

三月頃にその鳴き声が整って聞き惚れている内にまた高所へ移動して行く鷺である。夏場が「ホーホケキョ」の最盛期で、山で聴く鷺の大合唱には凄まじい迫力がある。筆者も自転車での登坂で、あちらこちらで鳴き交わす夏鷺に励まされた経験がある。あの声が懐かしい。

羽蟻来て机辺に騒ぐ雨上がり 阿部 幸代

初夏から盛夏にかけて交尾期を迎えた蟻や白蟻に翅が生えて飛び回る。家の中に入り込んでくると実にうつつうしい。句作に余念のない作者の文机の周辺を飛び交う羽蟻である。陰鬱な雨が上がって少し気分がほぐれたと思つたら今度は羽蟻の襲来である。嫌な日になってしまった。

傾城のごと一瞥や蜥蜴去ぬ 杉浦 千祐

映画やテレビの時代劇ドラマに登場する江戸の吉原や京の島原で権勢をふるった最高位の遊女を意味する傾城。客に向ける一瞥は、職業上の演出であらうが、まったく頭にくる態度である。作者は、突然自分の前に出現した蜥蜴が素早く隠れる時の眼差しに、傾城の冷やかな眼を感じたのである。

梅雨晴や左官二人の身の熟し 内田 章子

数日続いた雨が止み、今日は仕事が出来ると左官屋が張り切っている。左官職にもその経験年数と持つて生まれた才能によって技能の優劣があるだろうが、仕上げの技には目を見張るものがある。材料を無駄なく使ってきばきと作業を熟してゆく左官コンビの仕事ぶりに見惚れている作者である。

月涼し夢二の女首やはし 田中 弘子

竹久夢二は、代表作である〈黒船屋〉をはじめとして多くの女性画を遺しているが、その特徴を作者は「首やはし」と捉えている。人それぞれにその表現は異なると思うが、なるほどと納得のゆく言葉だと思う。筆者も夢二の絵が好きでいろいろの女性画を観たが、簡潔かつ的確な表現を考えたことがなかったので合点がいった。重くなく、そして、軽すぎない季語の幹旋がなかなか結構で、夏の宵に団扇を手にして縁台に腰掛けている女性像が浮かんできた。

香水の遅れてかをる夜会巻 室井早都子

広辞苑によれば、「夜会巻」は別の名で「夜会結び」とも言い、凶解と共に、明治・大正期に流行した髪型であるとの説明が為されている。この句の場合は、夜会巻風の髪型という解釈が妥当かと思うが、洗練された和服と身の熟しの女性が通り過ぎたあとの香水の残り香であろうから、時代を遡って桃源郷に迷い込んだ気持になったのではないかと思う。

西日受け縛られ地蔵の縄ごろも 森下山 菜

東京都葛飾区水元二丁目にある天台宗業平山南蔵院に安置されている地蔵尊で、大岡裁きの逸話のとおり、地蔵の身体全体が縄で巻かれている。この地蔵尊は、厄除け盗難除けや縁結びなど、諸願成就に靈験があるとされているが、由来書によると、むかし難病平癒を祈願する者が地蔵を縄で縛り、成就した時に縄を解いたことが始まりということらしい。縄だらけの身体を西日に曝された地蔵さんはさぞかし辛かろう。「縄ごろも」が言い得て妙だ。

坪庭へ風入る夕べ夏料理 石黒由美子

坪庭は、中庭・内庭と同義語であり、家の棟と棟、または室と室とに囲まれた庭のことであるから、せいぜい数坪ほどの庭と思ってよいだろう。以前京都の町家や旅館でこういう様式の潇洒な庭を見たことがあるので、掲句から感受する雰囲気が手に取るように理解できる。暈の和室に涼しげな薄縁を敷き、障子や襖を磨きぬかれた竹簾に換えて夏を迎える昔ながらの京都の生活様式である。坪庭に接した座敷で、そよ吹く夜風を肌感じつつ、趣向を凝らした夏料理を味わうのは最高の欲びであろう。風雅で臨場感のあるこの作品に、大いに詩情を刺激された。

香水を耳たぶに決め告白す

羽島秀子

「耳たぶに香水」は、門外漢の筆者にとって荷の重い課題であるが、香水を用いた人物のかんりの決意のほどが伝わってくる。誰が誰に告白したのか、告白の内容は、など、いろいろと気になる俳句である。

看板の鏝の光や夏至の街

石関六弦

かなり年数の経った店の看板に、夏至の日の夕陽が射し込んでいっていることなのか。その情景をつぶさに理解するのは無理であるが、昔の面影を遺している店の燻し銀のような貫禄を備えた看板が眼に浮かんでくる。

出産に立ち会ふ婿に玉の汗

元田亮一

七月に作者の次女が出産されたようで、その時のリアルな情景を詠んだ俳句と思われる。冷房が効いているのに、顔面から玉のような汗が噴き出ている婿殿である。この句を含め、後々家族の絆の証明となる貴重な五句である。

しみしわは苦勞の証百日紅

秋谷風舎

女性ほど丁寧ではないが、男性も歳に関係なく毎日一度や二度は鏡を見る機会があると思う。普段気にしていなかった自分の顔の変化に、或る日突然気付いて愕然となる。この俳

句はそう言う状況を言い表している。己の顔に顯れた染みや皺は、永年に亘る苦勞の人生を切り開いてきた証だと開き直っている男。庭には、根氣よく百日紅が咲き続けている。

合はせ漕ぐ息の荒さや舟遊び

川島夕峰

この句の内容から判断して、この舟は二人乗りの足漕ぎのボートだと思う。場所は湖か沼であろうか。ペアが互いに負けじと懸命に脚を動かしている。呼吸が合わないとうまく進まないと思うのだが、頓着せずに漕いでいる。涼を求めるどころか、二人とも汗びっしょりである。

人の匂また訪るる走馬燈

平野 楽

走馬燈を見ると、脳を刺激されてこれまでに過ごしてきた人生での出来事や想い出など、いろいろなものが顕れてくる。自分もそこその歳になったなあと思っていたが、何故か急に若返ったような爽快な気分になった。走馬燈に魔法を掛けられたのだろうか。

大泣きの稚の声止み夏の月

遠藤人美

真夜中に近所の家からけたたましい赤子の鳴き声が聞こえてきた。襁褓がびしょびしょになったのか、それとも空腹で眠れないのか、なかなか泣き止まないのので心配していたら、はたと泣き止んだ。夜空には、夏の満月が輝いていた。

水 琴 窟

(水明集八月号鑑賞)

池田雅夫

暮の春金剛像の阿吽かな

木谷葉子

「金剛像」は寺の門の両側に置かれる一対の金剛力士、すなわち仁王像のこと。その一方は口を開き、一方は口を閉じている。それを「阿吽」という。春から夏への端境の煌びやかな季節を愛で、その入れ替わりがあたかも、「阿吽の呼吸」で呼応している。その珠玉の時と金剛像を取合せている。

華奢な娘の押す車椅子風青し

嶋田洋子

か細い娘の介護を受けているのだろうか。車椅子を押すことも馴れないと真っ直ぐ進まないもので、つい力が入ってしまう。まして風の強い道ではなおさらのこと。健気な娘の献身的な態度に合わせ、「青嵐」ではなく、「風青し」の季語にすがすがしささえ感じられ、ひき立っている。

行く春や岩に石亀しがみつく

平野 楽

「石亀」は淡水にすむ亀で、幼いころはその色の特徴から「ぜにがめ」と呼ばれる。「亀の甲羅干し」と云われるように亀は陸に上がって日光浴をする。「行く春」の時の流れを思いつつ、「岩にしがみつく」石亀の気持ちを感じている。

明易し音軋ませて電車発つ

伊藤美津子

始発電車にちがいない。JR京浜東北線の大宮始発電車は4時ごろである。ちょうどその頃、東の空が明るくなり夜が明ける。早朝のしじまに、連結部分を「軋ませて」始発電車が動き始める。その金属音が一日の始まりの意気込みに聞こえたのだろう。「さあ、今日も一日、働くぞ」と。

巡礼の一期一会や五月晴

篠原さよ子

「巡礼」と「遍路」は混同しやすい。「巡礼」は各地の神社仏閣、聖地霊場を参詣して回ることで、季節感がない。一方、「遍路」は弘法大師修行の遺跡、四国八十八箇所の霊場を巡礼することである。一念發起して巡礼に出たのだ。その先々での「一期一会」に心が安まる。「五月晴」が効果的。

空缶に忘れられたる蝌蚪二匹

清水美千子

自然の中で遊ぶ児の姿が目につく。最近の外に出て、こうした遊びをする児が少なくなった。「おたまじゃくしは蛙の子」という歌があるが、実際に四肢が出るのを見ないと信じられない。児の行動の習性がよくとらえられている。

目標の夏木は遠し松葉杖

緒方みき子

転倒により足を骨折したのだろうか。完治まであと少し、歩行訓練をしているのだ。少しづつ歩く距離が伸びてきて、程よい距離に「夏木」が立っている。それを目標としたのだ。「遠し」を「近し」「に向かひ」などと比較してみたい。

古民家の軒の合唱 燕の子

飯室夏江

燕は家の軒先や駅のホームの天井裏など、人影の多いところに巣をつくる。そこで産まれた四、五羽の「燕の子」が大きく口を開けて鳴きじゃくり餌をねだる。「古民家」の場面設定、「軒の合唱」の比喩などに推敲のあとがみられる。

抄つても抄ひ切れない螢烏賊

北山建治郎

単純明快な句が却って「螢烏賊」の多さを強調している。あれこれと技法に走りがちなところを、あえて簡潔な口語で表現している。(抄つても抄つてもなほ螢烏賊)では、螢烏賊の多さを表せても、その細やかな趣が出てこない。

魚の眼のいよいよ透くる穀雨かな

清山尚己

「穀雨」は二十四節気の一つ。穀物を育てる雨という意がある。田畑ばかりではなく、池や川の水も増水し潤ってくる。穀雨で浄められた水で「魚の眼」もはつきりと見えるのだ。

待合せ葉柳揺るる数寄屋橋

小野町子

菊田一夫氏のラジオドラマ『君の名は』は映画でも大ヒットした。東京大空襲の夜、「数寄屋橋」で命を助け合った二人が半年後に再会を誓う悲恋の物語である。また、銀座の柳は多くの歌にうたわれている。それらを踏まえて拝読した。

白藤の香り 仄かな夜道かな

中村まどか

街灯の跡切れた郊外の道であろうか。暗くて、近づかないと気づかないほどの「白藤」。その香りだけが仄かに漂っている。気品の高い白藤がいつそう高貴に描かれている。読む音にも軽快なりズムがあり、推敲、工夫の成果であろう。

春眠や相似形なる猫と夫

横山礼子

作者の感性が重視される「春眠」は、発想把握の独創が難しいと云われる。しかし、実際に春眠を体験し、その実景を詠むことができる。春眠の夫の横には同じ姿勢、同じ体型の猫が眠っているのだ。その安らかな中に滑稽さを味わった。

行く春やゆきつもどりつ遊歩道

今西 操

「行く春」を惜しむかに「遊歩道」を行ったり来たりしている。華やかな春の陽気にも一進一退があることを「ゆきつもどりつ」が表わしている。それを己の身にたとえたのだ。

網野月を選

山紫集

旧姓で名乗る女の巴里祭

日高道を

街明かし屋根裏部屋のパリ祭

阿部幸代

授業抜け銀座へ二人パリ祭

三浦真由美

玄関に黒猫ねまるパリ祭

石黒由美子

螺子巻けば踊る人形巴里祭

笹本啓子

レコードにノイズの混じる巴里祭

寺町知子

朝粥の湯気の彼方にパリ祭

チヨビ髭のバンドネオンやパリー祭

遠き日のメケメケ逝けり巴里祭

パリ祭や今も聞こゆるヨイトマケ

手品師が口から国旗パリー祭

すれ違ふ若き日の父パリー祭

巴里祭や天より流るる夫の声

巴里祭やシャンソン歌手の銀の星

山小屋にシャンソン響くパリー祭

銀巴里の「美輪」の悲報や巴里祭

仏字紙に食み出る麺麭やパリー祭

アズナブル扉を開くる巴里祭

野口和子

梅澤輝翠

福田千春

持永喜夫

——以上特選

渋谷さいち

正木萬蝶

嶋田洋子

清水桂子

下川光子

霜多光代

菅原卓郎

菅原真理

パリ祭や今もあちこち戦の血	菅原靖子	バケツを抱へて闊歩巴里祭	西幅公子
銀巴里のマダム懐かしパリー祭	杉浦千祐	華やかにパレード続くパリ祭	野村美子
パリ祭や空回りする蓄音機	鈴木藻好	パリ祭青白赤に彩られ	畑宮栄子
中折れ帽をひよいと浮かせてパリー祭	鈴木玲子	パリ祭や熊野古道の道険し	原田自然
パリ祭の佐伯祐三レオナルフジタ	関谷多美子	口遊む「暗い髯」やパリー祭	原田秀子
LPでモントンを聴き巴里祭	染谷風子	spotifyでシャンソンを聴くパリ祭	樋口元美
老若の踊り明かすや巴里祭	反町 修	おとがひの小さき少女巴里祭	檜鼻ことは
黄八丈のベッドカバーや巴里祭	高橋満耶子	パリ協定を尻目に熱波パリー祭	平野 楽
マネキンのファッション映ゆるパリー祭	武田重子	SPのピアフの歌や巴里祭	保坂翔太
フランスの革命祝ふダンス哉	田中章嘉	風船を空へ見送りパリー祭	曲淵徹雄
をんなみな外股となりパリ祭	田中弘子	今更に猫を被るやパリー祭	松村笑風
思ひ出は香水の香のパリ祭	飛永 鼓	巴里祭や古本カフェは昼下がり	丸屋詠子
希望持つ未来の子らのパリ祭	南條きわゑ	パリ祭や抱擁交はす帰還兵	皆川更穂

反核の色薄めらるパリー祭

宮崎チアキ

パリ祭やレ・ブルー誇る多様性

横山 礼子

二人席にひとりのディナー巴里祭

室井早都子

パリ祭や権利に義務の付く合意

吉川 拓真

ラ・ブームのリバイバル上映巴里祭

元田 亮一

パリー祭北斎の青パリで見ゆ

綿引まりこ

トリコロル纏ふトルソー巴里祭

本橋 稀香

命とは自由な心パリー祭

青木 鶴城

翔べさうな帽子ゆらゆらパリー祭

森 和子

辻に立つ「睡蓮」買ふやパリ祭

秋谷 風舍

美輪、戸川、寺山もゐた巴里祭

森下 山菜

映写機的美輪明宏やパリー祭

新 暦文

セーヌ川とルーブル想ふパリ祭よ

森下 美智枝

巴里ローマ見ずに八十路やパリー祭

荒井 俱子

パリ祭にあやかりこの日祝ひ膳

山岸 久美子

巴里祭のイルミネーション戦なき世

新井のり子

パリ祭シベリア経由の日航機

山下 ユリ子

日本にも梅佳節有りパリー祭

飯田 忠男

パリ祭の見渡す街やスフレ待つ

山戸 美子

楽聖も時には激怒パリー祭

池田 珪子

パリー帽子も馬車も花飾り

山中 いちい

国境のなき青空や巴里祭

池田 雅夫

巴里祭マロニエそよぐ裏銀座

湯浅 和

バケットの隠す胸元パリ祭

石田 慶子

パリ祭や美輪明宏もすでに亡く

横山 君夫

ふらり行く下駄の芙美子やパリー祭

石井 直子

男物の香りを選ぶパリー祭

「民衆の歌」が近づく巴里祭

パリ祭やカフェカーテンのレース白

色旗のフラッグダンス巴里祭

金髪に染むる十九のパリー祭

パリ祭に合はせ仕立つる真紅のドレス

テラス席の二人の未来パリー祭

銀巴里の美輪も逝きたりパリー祭

モンタンもヴァルタンも良し巴里まつり

様変わりする銀座の明かりパリー祭

吸殻に口紅の痕パリー祭

巴里祭誰ぞ奏づる手風琴

石川理恵

石関六弦

伊藤美津子

遠藤人美

岡田宣子

川島夕峰

木谷葉子

木村小麦

倉田星歩

河野はるみ

小林京子

小山あつ子

俳句

10月号
予告

9月25日発売

予価1,350円(本体1,228円)⑩

巻頭作品50句 片山由美子

作品21句 奥坂まや・岸本尚毅

特集

遊びのすすめ

- 俳と遊と戯
- 韻律と言葉遊び
- 遊びとルール
- 俳諧味再考
- 連句と題

特別企画

古典題詠ルネッサンス

令和丙午六百番歌合 恋五十題競詠
—— 高橋睦郎×高山れおな×岩田奎
司会・望月とし江

句集特集

山尾玉藻句集『くれぐれと』

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売!

電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>) など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団

発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

山紫集作品評

網野月を

旧姓で名乗る女の巴里祭

日高道を

この女性結婚しているのである。作者は誰かを想定しているのかも知れない。女性の自立の觀念がパリでは確立しているのに、パリジェンヌという人間性を考慮しているのかも知れない。句中に情報はない。現代では旧姓を名乗る男性俳人もいる。只、この句のポイントはやはり「女」なのである。

街明かし屋根裏部屋のパリ祭

阿部幸代

パリの旧市街地の建物は高さ制限があつて、大概は五階建てである。シテ島やサン・ルイ島の古い建物は後付けのリフトもないアパルトマンも多い。運よくリフトがあれば最上階まで後付けのリフトで昇降できるのであるが、屋根裏部屋はその階から階段で上ることになる。ただ屋根裏部屋は太陽の恩恵にあずかることが出来る。上五の「街明かし」がヨーロッパの古い町並みを想起させる。

授業抜け銀座へ二人パリ祭

三浦真由美

季語「パリ祭」は何とも不思議な季語である。そもそも日

本のことではない。なんでも一九三二年制作、ルネ・クレール監督の映画の題名 *Quarante Juillet* を巴里祭と翻訳したものである。それだけに日本人のパリへの憧憬を掻き立てている。上五中七の「授業抜け銀座へ二人」は作者の実体験であろうか。

玄関に黒猫ねまるパリ祭

石黒由美子

「ねまる」の語義は多岐にわたる。この句の場合は「寛いでいる」くらいに解釈した方がよいだろう。中七の「黒猫」と座五の季語「パリ祭」の關係は、読者の想像に任されているということである。何故「玄関に」いるのか、どうして「黒猫」なのかは、理屈ではないのである。理屈でないところに筆者は詩興を感じる。句中の語彙の取合せ方は理屈になつていれば詩興を損なうのであり、ただの報告になつてしまうことも多い。また何らかの關係性が希薄である場合には、無意味句になつてしまうこともある。剣先にも似た微妙なところにこの俳句は成立している。

螺子巻けば踊る人形巴里祭

笹本啓子

日本のからくり人形ではなくて、フランス人形のそれであろう。「巻けば」の已然形ということは、実際に踊つたのである。句中にそれ以上の情報はないが、読者の想像を助長するには十分であろう。というよりも言い過ぎないからこそ、読者に想像の余地を与えて呉れているのである。

レコードにノイズの混じる巴里祭

寺町知子

パチパチというLPの音のなつかしさであろうか。不思議なもので、人の耳はそのノイズを避けて本来の音楽だけを聴きとれるようになっていて。であるからこそ、音質云云の前にレコードで音楽を楽しめるという文明の息吹に浴した感があるのである。映画『巴里祭』を彷彿とさせてサウタージを感じさせてくれる。

朝粥の湯気の彼方にパリ祭

野口和子

「パリ祭」とは何と言っても所詮は「朝粥の湯気の彼方に」ある異郷の地の物語である。それは、ジャンとアンナの遣る瀬無い恋物語である。その距離感を作者は「朝粥の湯気の彼方に」と表現した。見事というしかない。

チヨビ髭のバンドネオンやパリー祭

梅澤輝翠

「チヨビ髭」とはチャップリンのそれである。「チヨビ髭」の輩が「バンドネオン」を弾いている。「パリー祭」にとつては、如何にもなのである。「パリー祭」の華やかさとは裏腹に、私たち日本人には「バンドネオン」はノスタルジーを誘うものでもある。

遠き日のメケメケ逝けり巴里祭

福田千春

美輪明宏いや丸山明宏である。日劇で彼が歌う *Méque méque?* (だけどそれがどうしたの?) を巧みに句に取り入られて、「メケメケ逝けり」と人物像を描出している。そういうわけで日本では「パリ祭」といえば、銀座であり美輪明宏であるのだ。

パリ祭や今も聞こえるヨイトマケ

持永喜夫

この句も美輪明宏である。美輪明宏への追悼句ということならば、この句は直截的であり分かり易い。深読みを許していただければ、作者と「ヨイトマケ」の関係性である。もうすでに廃れてしまったが、かつて高度経済成長の初期までは建築現場や土手普請などで、「ヨイトマケ」が聞こえていた。地固めのために数人で重量のある槌を滑車などで挙げ下す際の掛け声である。作者は美輪明宏の歌声と同時に、実際のよいとまけを回想しているのではあるまいか。

手品師が口から国旗パリー祭

渋谷さいち

この手品師は大仕掛けのパフォーマンスを披露するマジシャンというよりは、クラウン(道化師)に近いパフォーマンスをしているように想像した。「口から国旗」を出すパフォーマンスはネタバレバレなのだが、それでも楽しめるのはこの手品師の芸が極められているからである。マジシャン、クラウン、そしてジャグリングやバルーンアートなどが「パリー祭」の観客の目を楽しませている景なのである。

すれ違ふ若き日の父パリー祭

正木萬蝶

取合せ句の典型的な技法を使つての作句である。若き日の御父様はさぞモダンな方だったのである。座五の季語「パリー祭」と取り合わせる程の方であるから、想像するに余りある。上五の「すれ違ふ」に作者の回想と浮き浮きした気分が凝縮されている。

鼓笛集

白靴のりハビリ 励む廊下かな
 終バスに 乗れば ふるさと 星涼し
 脇役も 作法 それぞれ 新牛蒡
 夏涼し「色即是空」と 掌に
 風死せり 街なかに 建つ 裸婦の 像
 週末は A I の なき 釣堀へ
 巴里祭や 日本国旗は 誰のもの
 誰も 美女 美女 は より 美女 サン グラス
 伝統工芸 険しき 道や 蟻の 道
 明易や 配達人の 来る 気配
 ヤッホーと 衍行き 交ふ 夏の 山
 梅雨 晴間 猫と 目の 合ふ 露地 谷中
 厨なる ア ラーム 高し 夏の 朝

木谷 葉子
 皆川 更穂
 門真 宏治
 丸屋 詠子
 新井のり子
 菅原 靖子
 吉川 拓真
 横山 礼子
 以上特選
 川島 夕峰
 木村 小麦
 倉田 星歩
 小山 あつ子
 篠原 さよ子

夏の 甘き 桃の 香り や 仏の 間
 晩婚に 福あれ ころと 夏 鶯 雨
 初恋を 忘るる 死を 抱く けり
 夏空や 命は 裡に 死を 抱く けり
 蟻の 国 秩序の 破壊 なかり けり
 万人が 平和を 祈る 終戦 日
 没後 百年 塔を 完成す 夏の 空
 あつあつの 紅茶 一杯 雨 明くる
 担い手は みな 移住者や 梅実も ぐ
 補助輪は 使はぬ ままに 若楓
 女将より 先づは 一杯 冷し 酒
 青東風や 潮満ちたりて 子は 親に
 学食の カレー 大盛 雨 上る
 アイドルの 巨 大 ポスター 熱帯 魚
 青き 闇 線 香 火 落 つ る 時
 駅ナカで 蕎麦に 冷や 酒 午 後 六 時
 金魚て ふ 赤き 命を イン テリ ア
 紐解けば 犬 駈 け ま は る 夕 立 原
 車椅子 デイ サー ビ ス の 七 夕 竹
 たふたふと 利根 川 太 来 半 夏 生
 油照地下 生活 来 近 未 来
 藍染を着こなす 女 将 罌 粟 の 花
 フュエンス 行く 昼 顔 の 笑 み 境 界 線
 梅雨 晴れ や ロード バイ ク の ペア が 行 く
 木道を 日 焼 夫 婦 の 口 喧嘩
 策にとる 蚕豆の 湯 気 薄 み どり
 二十三・四度の 奇跡 夏至の 午後
 雨上がる 雲は んの り と 夏の 夕
 シヤワー 浴び 夕 暮 の セ ル リ ア ン ブ ル

嶋田 洋子
 杉浦 千祐子
 鈴木 藻好子
 関谷 多美子
 反町 重修
 武田 弘子
 田中 洋子
 寺田 洋子
 島町 風花
 樋口 元美
 平野 楽
 松村 笑風
 三浦 真由美
 室井 早都子
 持永 喜夫
 元田 亮一
 本橋 稀香
 森下 山菜
 山下 ユリ子
 山中 いちこ
 綿引 まりこ
 秋谷 風舎
 阿部 幸代
 飯田 忠男
 石井 直子
 石黒 由美子
 石関 六弦
 伊藤 美津子
 遠藤 人美

鼓笛集作品評

青木 鶴城

白靴のリハビリ励む廊下かな

木谷 葉子

内科か外科かは分らないが、白靴から内科であろうと推測する。私には幸いにして経験がないものの、病後のリハビリが大変な精神力と体力を必要とするのは想像に難くない。上五の「白靴の」から、作者自身のリハビリではなく、見舞う人が長い廊下を行き来する姿を見守っているのであろう。作者の心の中の「がんばれ！」の思いが伝わってくる。季語として据えられた「白靴」がとても良い働きをしている。

終バスに乗ればふるさと星涼し

皆川 更穂

深夜バスで帰省をする作者の姿が見える。長距離バスは乗り込んでしまえば、あとは椅子にもたれて眠るだけなのである。目が覚めればもう古里。さあ帰ろうとバスに乗る時ふと見上げた夜空は澄み渡る星空、暑ささえも忘れさせてくれたのである。リズムが良く、すっと読み下せる秀句である。

脇役も作法それぞれ新牛蒡

門 真宏治

不思議な魅力を持った句である。およそ牛蒡なんて主役になることはない。とは言え牛蒡のような脇役がないと主役の料理が引き立たない。そのような脇役にも調理の方法や盛り

付けの作法があるのである。人にあっても目立たぬ脇役には脇役の作法があるというのだろう。

夏涼し「色即是空」と掌に

丸屋 詠子

四十度を超える酷暑が続き、なんとも耐え難い夏。作者はそんな暑さを乗り越えるのに般若心経の「色即是空」を掌に書いたのである。まさに「心頭滅却すれば火もまた涼し」を般若心経の言葉を掌に書くことで実践しようとしたのである。俳諧味のある面白い句である。

風死せり街なかに建つ裸婦の像

新井のり子

風もなくじりじりと照り付ける日、街なかで裸婦像を見つけた作者。裸婦像を見て、裸がうらやましいと思ったのか、裸ではさぞかしい暑いだろうと思ったのか。おそらくは裸になれる像が羨ましいかと思っっているに違いない。「風死せり」の措辞が素晴らしい。

週末はA Iのなき釣堀へ

菅原 靖子

AIって何？と思っていた世代も今やそのAIに頼る時代となった。尋ねれば何でも答え、絵のデザインでさえも瞬時にやってくれる、なんと俳句さえも作ってしまうのである。作者はそのような文明から釣堀へ逃避するのが週末の楽しみなのである。AIが上手に使われた秀句。

パリ祭や日本国旗は誰のもの

吉川 拓真

パリ祭は、フランス革命を記念した行事である。ドラクロアが描いたフランス革命を扱った絵画「民衆を導く自由の女神」には赤い旗を掲げた女性が描かれている。混沌の中にある日本の政治を一体誰が旗振りをしてくれるのかと、作者は問う。

誰も美女美女はより美女サングラス

横山 礼子

言葉の遊びとウイットの効いた面白い句である。日本人にとってサングラスは、気取ったアイテムであった。サングラスをすると誰もが美人に見えるのだが、もとよりの美女はさらに美女に見えるのである。さて、作者はどちらの美女であろうか。

夏空や命は裡に死を抱く

関谷多美子

何かとても興味を覚える句。命は「生」、命がなくなれば「死」、確かに命の裏には死が存在する。作者はそのことを命が死を抱いているのだと言う。ふと立ち止まる句である。

没後百年塔完成す夏の空

田中 弘子

スペインのバルセロナにある有名な建築サグラダ・ファミリアのイエスの塔が漸く完成し記念式典が執り行われた。設

計者のガウディが交通事故で亡くなったのが丁度百年前。作者は、夏の空に遠いバルセロナを思っているのである。

アイドルの巨大ポスター熱帯魚

室井早都子

部屋を飾る巨大ポスターはきっと壁一面を占拠しているであろう。女性の作者にとつてのアイドルはやはり男性アイドルだと推測する。ポスターとともに存在する熱帯魚の対比が面白い。作者は今、アイドルと熱帯魚のどちらが「押し」なのだろうか。

油照地下生活来近未来

綿引まりこ

地球環境の変化はどこまでも異常で、酷暑、極寒、旱、大洪水と、およそ今まで普通に生活出来た環境ではなくなりつつある。作者はもうすぐ人間も地下生活を強いられる時が来ると危惧をしているのである。すべてを漢字で纏めたのも功を奏している。

二十三・四度の奇跡夏至の午後

石関 六弦

二十三・四度は公転に対する地軸の傾き。この傾きこそが四季の、春分、夏至、秋分、冬至を生むのである。作者はこの四季が生まれることを奇跡と感じているのである。

~~~~~  
今回も添削コーナーを試みます。参考にして頂ければ幸いです。(作者の句意から外れるかも知れませんがご容赦ください)

○雨上がる雲ほんのりと夏の夕  
夕立あと雲のほんのり赤味帯ぶ  
「ほんのり」は「赤い」「青い」等の色や「匂う」等を伴う言葉で、雲がほんのりでは不自然です。

○シャワー浴び夕暮のセルリアンブルー  
夕暮のセルリアンブルーシャワー浴び  
語順を変えてセルリアンブルーとシャワーを並列の関係にします。「シャワー浴び」に続けると意味が通じません。

○伝統工芸険しき道や蟻の道  
伝統工芸休むことなき蟻の道  
険しき道と蟻の道の関係が良く分かりません。伝統工芸は蟻のように休むことなく精進をしなければなりません。

○明易や配達人の来る気配  
明易や配達人の走る音  
気配では具体的な景になりません。具象を取り合わせます。

○ヤッホーと銚行き交ふ夏の山  
バカヤローの銚行き交ふ夏の山  
「ヤッホー」では当たり前すぎます。「バカヤロー」とかが意外性があり、ドラマが生じます。

○厨なるアラーム高し夏の朝  
炊飯のアラーム高し夏の朝  
厨のアラームを炊飯のアラームとして厨の景を具体的に。炊飯のアラームだと朝が生きます。

○初恋を忘るころや虎が雨  
初恋を忘るころや桃かをる  
初恋と虎が雨の関係が良く分かりません。桃にしました。

○滴りやトンネル抜けて天城越え  
滴りや天城トンネルほの暗し  
「滴りや」と感嘆しているのに、フォーカスしているのが「天城越え」では少し変です。天城隧道そのものにフォーカスしてみました。

○女将より先づは一杯冷し酒  
先づ一杯女将奨める冷し酒  
原句は、女将はさておいて、という意味にもとられてしまっています。「先づ一杯」で切れをいれて、女将に冷し酒を奨めて貰いました。

○青東風や潮満ちたりて子は親に  
青葉風潮の満ち引き子は親に  
原句の「潮満ちたりて」が「子は親に」に意味が繋がりません。「潮の満ち引き」とすると時間の経過を表します。

○青き闇 線香花火 落つる時  
線香花火 果てて 忽然 青き闇  
「線香花火 落つる時」が曖昧です。「賑やかな花火 果つれば  
青き闇」もありかも。

○駅ナカで蕎麦に冷や酒 午後六時  
駅ナカで蕎麦に冷酒 仲間 増へ  
午後六時が説明になってしまいました。 駅ナカでの冷酒は  
勤務帰りであるうと読者は想像します。

○車椅子 デイサービス の七夕竹  
七夕や デイサービス の 車椅子  
七夕と言うと誰もが笹竹を想像します。 語順を変えて 車椅子  
子に フォーカス しましょう。

○フエンス 行く 昼顔の 笑み 境界線  
境界のフエンス 昼顔 笑みて 這ふ  
下五の「境界線」が浮いてしまいました。 境界のフエンス  
で意味が十分通じます。 擬人化も「行く」ではなくて「這ふ」  
が良いのでは。

○梅雨 晴れや ロードバイク の ペア が 行く  
梅雨 晴や ロードバイク の ペア ルック  
「ペアルック」にすることで ペア に 意味が 出て きます。  
今月も 皆様 から たくさん の 投句 を 頂きました。 これ から も  
より 良い チャレンジ 句 を 期待 して おります。



# 俳誌望見 梅澤輝翠

## 「豆の木」

二〇二六年 六月発行 No.30  
同人誌 代表 こしのゆみこ

一九五〇年以降に生まれた若い世代の俳人たちによって、一九九四年に結成、超結社（特定の結社にとらわれない）の俳句会。（年刊誌）

特徴 結社の垣根を越えた集まり、作る会のスタイル。会場に集まってその場でユニークな席題を出し合い多量の句を次々と生みだしていくライブ感のある句会。

定期雑司ヶ谷句会 不定期祝日あるいは日曜日

木曜句会 現在夏雲ネット句会 1・3木曜日

anthology 三十一名句より二十四句

サンフランシスコへの旅、米国の俳句協会大会に参加

海にいて海を見ぬ 犬冬始め 小野裕三

不時着に似て秋霖の真夜の目覚め 柏柳明子

長き夜の哀しみとの車間距離 片岡秀樹

黄落期旅の手紙のように着く 川田由美子

水の音してふきのたうふきのたう 岸田祐子

戦争がおわらないので星走る こしのゆみこ

金継の皿載せ河童夏が来る 近 恵

寒いと言ったら消える遊び、さむ  
頬骨もてあまし春眠といふぬかるみ  
高橋洋子

鳥の視力にぎやかに遥かに雪崩  
田島健一

月は朧ろに電子認証されてます  
田中信克

ぶらんこを飛び降り新しい私  
月野ぼな

どこからかモールス信号春隣  
鳥山由貴子

レントゲン見て気分もネガティブ  
中内火星

トマト切る今朝の口の大きさに  
東濃 誠

浅春や少し手を振る見てゐなくても  
東濃万利子

犬宮のなかのお守り日脚伸び  
三島ゆかり

くりいむばんも涙も不意にあふれたる  
三宅桃子

浦島草のんきな人です愛されます  
室田洋子

螻蛄鳴くや貧乏籤を引いたかも  
矢羽野智津子

日盛りを来て百号の女の眼  
山岸由佳

子と母を加へて月の客となる  
鷺巢正徳

春の木へ全部話してすつきりす  
内野義悠

透明な息して涅槃図を見たり  
大石雄鬼

二〇二五年第三十一回二十句競作豆の木賞

岡田由季「玉結び」二十句より三句

糸端のみな玉結び秋の雨

電車待つおなもみ一つづつ外し

小さき鉢までいちいち茸生え

年刊誌故内容は盛り沢山、同人の俳句を第一に紹介させて頂きました。

令和八年 度

# 水明夏行の記

青木 鶴城

## 第一日（七月二十九日）

異常な暑さが続き四十度を超える酷暑が各地で記録される中、今年も恒例の夏行が三日間開催されました。第一日は三十五名が参加、席題の「大暑」及び詠込みの「告」で三句の投句を競いました。一日目の結果は以下の通りでした。

### 主宰詠

買立ての帽子を風に大暑の昼  
時告ぐる大名時計夏夕べ  
峰峰を法螺鳴り渡る大暑かな

### 主宰選（特は三日間を通じての超特選）

地天皇も僕も元氣よ大暑の日  
しだらなき時計針大暑の花時計  
特打水や一番客を告ぐる声

京 子

告白の後の静寂水中花

子が喪主の告別式や日の盛

大暑の日勝ちて校歌を高らかに

戦闘機の爆音消えず大暑かな

珈琲の水転がし告白す

地下鉄の出口を塞ぐ大暑かな

予告編続続と冷房のシネマ

天峡五軒草に沈む大暑かな

目を伏せて告ぐる想ひや藍浴衣

吊革に傾く五体今日大暑

敗戦をぬぐ大暑のユニフォーム

信号の赤色長き大暑かな

明急ぐ時告鳥や中華街

誰も居ぬ昭和の団地大暑かな

公園に鳥も子も無く大暑かな

水明人の熱気漲る大暑かな

フィナーレの花火で告ぐる恋心

特選無指数不快指数の大暑かな

夏帽の君に告白榛名富士

目に肌に光刺さりて大暑かな

火の国の大暑の午後的大地震

告白のチャンス逃がし花火果て

午後二時の大暑を告ぐる広報車

枝豆の無くなる迄に告白す

縞馬の縞ゆらめきて大暑かな

人山宿に日暮れを告ぐる河鹿笛

京 子

美智枝

翔 太

稀 香

マスマ

喜 恵

更 穂

弘 子

はるみ

道 を

真 理

風 子

修

久美子

延 昭

宣 子

章 子

桂 子

町 子

昇

だらだらと時の過ぎ行く大暑かな

水切りの石も灼くるや河大暑

告白の記憶の戻る宵祭

ジーンズの雫気化する大暑かな

地震の地の今日の大暑を思ひつつ

大暑中樞児送る母の顔

狐狸妖怪も鳴りを潜む大暑かな

屋根裏へ古椅子移す大暑かな

碧の濃き重すぎる空大暑かな

サングラスポストに愛の催告書

大暑なり坂東太郎穏やかに

夏の宵一子相伝能舞台

けふ大暑盛切で酌む田舎酒

告げ口にならぬ訛声鴉の子

面ごしに気合の一刀大暑かな

宣告や一息に飲む冷し酒

親子して大の字に寝る大暑かな

大暑なりぐるりまとめる長き髪

ライオンのどたりと眠る大暑かな

庭草の健気に立てる大暑の日

時告ぐるからくり時計夏休み

被告国に触るるを禁ず原爆忌

息災を互ひに告げて干すビール

あいの風柱時計の告ぐる音

鬼百合や告白したき事ありて

鶴 城

翔 太

道 を

稀 香

桂 子

章 嘉

マスマ

ひろこ

真 理

風 子

喜 恵

昇

延 昭

宣 子

京 子

和

更 穂

章 子

弘 子

徹 平

徹 雄

美 津 子

町 子

― 以上特選 ―

七夕や星に告ぐるは胸の内 知子  
 野菜畑みな垂れて色失す大暑かな 公子  
 時告ぐる鐘の音届き夕焼けて はるみ  
 海折や傘を展げて愛を告ぐ 月を  
 合点ゆく考の忠告冷し酒 卓郎  
 夏の夜寿命の予告欲しいなり ひさの  
 大暑の日庭師ファン付き作業着よ 美智枝  
 首かしげ季節告げたる百日紅 久美子  
 経験なき地震に大揺れ大暑かな チアキ  
 思はざるメタボの告知秋近し 鶴城

互選による高得点者

一位 小林京子 二位 皆川更穂  
 三位 染谷風子 四位 森下美智枝  
 五位 石井喜恵 六位 曲淵徹雄  
 七位 本橋稀香 八位 五明昇

第二日 (七月三十日)

二日目も暑さの中、さいたま共済会館に会場を移して開催され、二十八名の参加者が席題の「夏の果」と「開」の詠込みでの三句を競いました。二日目の結果は下記の通り。

主宰詠

翠蔭や開基の僧の謂れの碑

兄貴遺愛の襟開き弘きシャツ夏果

一言居士と胸襟開く団扇風 主宰選 (特は三日間を通じての超特選)

開壘の碑文かするる焼田かな 卓郎

サイレンの響む球場夏終る 〃

クレインの長き夕影夏惜しむ 〃

朝風や宙に開きて投網の弧 かつ子

夏の果駅舎の裏の錆ボンブ 〃

悠然と不開の門を越す揚羽 徹雄

夏惜しむ腕輪の跡の著き肌 〃

特褐色の手足黧章夏惜しむ 千祐

江戸つ子は背開き土用鰻の日 〃

特胸襟を開けば見ゆる重信忌 鶴城

古書街に咖喱の匂ひ夏惜しむ 〃

特鎮魂の長きサイレン夏終はる 道を

青年の厚き胸板夏の果 京子

封緘を開くれば妻の匂袋 月を

足跡の残る渚や夏の果 稀香

孔雀の羽ゆつくり開く夏の果 宣子

日焼尻に試合開始の闘志満つ 章子

特鵲尾照りて唐招提寺夏の果 風子

枕カバー可愛すぎしか夏の果 更穂

ソータ水一音鳴らす開放弦 ひろこ

—以上特選— 直子

傷跡の薄く残りて夏の果

川辺りに虫の飛び交ふ夏の果

内向きの心開くや夏の果

ゆく夏や磯の香届く終電車

ルート「5」を開く呪文や富士登山

夏の果開聞岳の夢うつつ

児は絵本開きしままの昼寝かな

茅の輪立つ開山堂に祖師の像

開門前の戸を降りてくる蝸牛

夏の果翳んで終る能登半島

団塊の人がゴロゴロ夏の果

夏果ての黙が行き交ふ交差点

開壘の村人集ひ夏祭り

一つづつ点る散居や夏の果

開静の魚鼓のひびきや百日紅

積ん読の嵩増すばかり夏の果

夏の果庭にばつんと三輪車

山房に開かずの間あり八重葎

連絡が途絶え心配夏の果

砂底に眠れる指輪夏の果

懐かしむ穂高の雄姿山開き

店開きいざ生ビール飲み放題

朝焼けや噴煙登る開聞岳

碧の色多し絵日記夏の果

思ひ出を海に流して夏果つる

楽

真理

チアキ

マスマ

ひさの

月を

章嘉

風子

ひろこ

徹雄

道を

昇

はるみ

延昭

かつ子

章子

真由美

更穂

美智枝

京子

公子

千祐

稀香

宣子

鶴城

互選による高得点者

一位 染谷風子 二位 境 延昭  
三位 五明 昇 四位 皆川 更穂  
五位 曲淵 徹雄 六位 日高 道を  
七位 石山 かつ子 八位 青木 鶴城

山本主宰は五位でしたが、ご辞退されました。

第三日 (七月三十一日)

三日目も暑い日となりましたが、浦和コミ  
ュニティー第十四集會室に会場を移し、  
三十五名の参加となりました。三日目は時間  
の都合で二句の投句、席題は「虫送り」と  
「配」の詠込みでしたが、「虫送り」の季語に  
は皆さんが苦労された様子でした。

主宰詠

訳の分からぬ歌も交りて虫送り  
大奥「江島」配流の跡や蟬時雨  
主宰選 (特は三日間を通じての特選)  
暗闇に紛る男女虫送り 道 を  
判官の田虫送りや八代目 月 を  
山伏の法螺ゆく蛙や虫送り 翔 太  
烏賊火燃ゆ配流の鳥を遠巻きに 昇  
虫送り獅子身中の虫までも 稀 香

故郷の風も配達お中元  
避難所に心配りの花氷  
特 一列に火の粉立てゆく虫送り

―以上特選―

花火果てせせらぎ黙を配りけり  
配役を主役に変へて夜の秋  
炎昼の熱気も共に宅配を  
夏場所の軍配三度優勝旗  
山峡を労農のみの虫送り  
配謫の翁の檻樓や夏の月  
峻嶺に神の気配や土用東風  
置配をしとどに濡らし夕立去る  
気配りと目配りを盛り夏料理  
心太氣の合ふ人は同年配  
代替りの菩提寺の僧虫供養  
夏まつり差配きりりと襷掛け  
虫送り空へ灯の祈りかな  
虫送り村人の声晴れやかに  
向日葵の枯れて季節の移る気配  
子らの声闇にこだます虫送り  
夏料理塩の按配細やかに  
配色のすてきなドレス夏の宵  
照らさるる揃ひの法被虫送り  
配役を賽の目で決め夏芝居  
虫送り足下照らす提灯で  
秋隣配流伝説隠岐島

真 理 更 穂 かつ子  
桂 子 楽 舎  
徹 平  
更 穂 かつ子  
卓 郎  
喜 恵  
京 子  
真由美  
マスミ  
千 祐  
葉 子  
ひさの  
久美子  
公 子  
修  
美智枝  
直 子  
風 子  
章 嘉  
道 を

互選による高得点者

美妙なる天の配剤お花畑  
秘境の駅に獣の気配夕焼空  
安曇野の水の匂ひや虫送り  
昔語りの配給切符盃蘭盆会  
虫送り田中の墓を浮かせけり  
父違ひの子等の背丈や虫送り  
祖父母へと氷菓を配る三歳児  
被災地巡る炎天の排水車  
虫送り闇に動めく火の饗宴  
虫追ひの男の雄姿田の灯  
能舞台配流の鳥夏の月  
気配りは平和への道日輪草

月 を 翔 太  
延 昭  
徹 雄  
ひろこ  
章 子  
稀 香  
真 理  
チアキ  
宣 子  
鶴 城

一日間を通じての特選句の中から主宰選に  
より超特選の七句、三極の天、地、人が決定  
され超特選には主宰の短冊、三極には色紙が  
主宰より贈呈されました。また、三日間の皆  
勤賞として、二十五名の方々へサートイーワ  
ンのアイスクリーム券が贈呈されました。皆  
様大変お疲れ様でした。

# 風 声

○現代俳句九月号「地区の力 地区協会報を読む」欄  
秋尾敏氏の鑑賞により

面会の女は寝てをり桜餅  
語り手自身が入院しているようだが、客観的描写かも。  
面会に来た人は眠り、おそらくはその人が持参した桜餅が目の前に。さて、これを食してよいものか。

○現代俳句九月号「第三回現代俳句『風を詠む』」欄

地に乾ぶもの攫って行けり初嵐 石井喜恵  
金秋や江ノ電で行く極楽寺 大塚茂子  
夏野原縄文研の地下探查 近藤徹平  
鰯雲自然の紡ぐ点描画 反町 修  
出し汁は夫の裁量とろろ汁 原田 秀子  
初蟬や唐突に来て声となる 島津初花  
○くぢら（中尾公彦主宰）八月号「受贈誌美術館」欄  
凱旋の将の気分ぞ薔薇の門 鬼之介  
○好日（高橋健文主宰）八月号「受贈誌御礼」欄  
シーソーの支点力点山笑ふ 鬼之介  
○菜の花（平賀節代主宰）八月号「諸家近詠」欄  
シーソーの支点力点山笑ふ 鬼之介

○駒草（西山睦主宰）八月号「句誌巡り」欄  
山田桂氏の鑑賞により

困民の郷を潤す寒九の水 網野月を  
養蚕が行き詰まり困窮した農民らが蜂起したのが秩父国民党事件。その地を今寒九の水が潤し癒している。札所巡りに賑わう秩父に昔日の影は見えないが、寒九の水がその記憶を思い出させているようだ。先年秩父吟行途次に立ち寄った蕎麦屋に、困民党の劇のビラがあつたのを思い出した。地元の大切な歴史なのだ。

○衍（山本一步主宰）八月号「受贈誌の一句」欄  
白き羽空に打ちつけ鶴帰る 反町 修

（日高道を抄出）

## 水明発展基金御礼（敬称略）

— 令和八年八月三日現在 —

|       |     |    |   |      |     |   |
|-------|-----|----|---|------|-----|---|
| 大場順子  | 100 | 10 | 口 | 山口富子 | 5   | 口 |
| 山本鬼之介 | 100 | 10 | 口 | 匿 名  | 80  | 口 |
|       |     |    |   | — 合計 | 195 | 口 |
|       |     |    |   |      | 80  | 口 |
|       |     |    |   |      | 10  | 口 |

『俳壇』（八月号）

今月の  
副主宰

俳句は多神教である。その時々で、願掛けする神様を選ぶのは、蓋然性が高いと思うのである。一つの主義やイデオロギーに縛られないのが芸術の本質だと考えるからである。いや、あらゆる主義やイデオロギーを包含する力を芸術は持っているのである。

凜

網野月を

「水明」

やはらかくて好きにほひする春の午后

みどりごに吾をさがすや子供の日

ただ眠る春日の中にただ眠る

俳壇ワイド 作品7句



網野月を（あみの・つきを）

一九六〇年 与野市（現さいたま市中央区）生  
一九八三年 「水明」入会  
二〇二二年 「かな女賞」受賞  
二〇二四年 「水明」副主宰  
一般社団法人現代俳句協会常務理事、同GHOC  
センター長

両腕に重き軽ろさを立夏かな  
マクベスの眉間の霽るる聖五月  
夏霧の漣へ溶けゆく一日かな  
笑顔より泣き顔愛し若葉光

精鋭  
16句

# 万物の息

吉川拓真

水明

こんちえと

noi

春風に舞ふ袋にも生まれあり  
新婚のシェフパスタに添ふる水菜  
徒に過ぎゆく、昼の桜餅  
春の水喧嘩知らずの小学生  
遠慮無き鰻のけむり春の闇  
春の日や西郷像とまちぼうけ  
ポリープの手術に祈る春の絵馬  
母の日の二軒目とする喫茶店  
梅雨の夜やペットボトルの音が鳴る  
万物の息の始まる喜雨の朝  
七月のハートマークは濃いだらう  
言葉から愛も破壊も原爆忌



蜘蛛の囲の銀に閃く用水路  
子と父とボールを回す日日草  
冷酒かな恐竜映画つまみとし  
駅舎内旋回したる夏燕

# 水明例会

## 第一例会（浦和）

菅原卓郎 報  
小林京子

身に入むやピエロは縦に眼閉づ 喜恵  
身に入むや絶筆の書を文机に 〃  
身に入むや「おれおれ詐欺」の落し穴 和子  
身に入むや触るれば萎ゆる野辺の草 由紀子  
身に入むや巴の墓は石ひとつ 順子  
身に入むや母の形見の一つ紋 はるみ  
身に入むや昭和の硬貨疎らなり 亮一  
遠会釈かはす溽暑の交差点 卓郎

——以上特選——  
解釈はすべて読み手に落と文 延昭  
身に入むや風は真つすぐ能舞台 節代  
身に入むや「原爆」語る講師師 和子  
無事を問ひ問はれ身に入む独居かな 由紀子

## 第二例会（東京）

山中みどり 報  
青木鶴城

身に沁むや敦盛最期の須磨の海 マスミ  
折口信夫を釈迢空と知る夜長 順子  
家事からの釈放叶ひ新涼に はるみ  
釈明の余地なき罪や身に入むる チアキ  
身に入むやすでに墓前に手向け花 稀香  
病得て身に入む母の小言かな 千祐  
釈清吟母と思へぬ盆灯籠 亮一  
一人酒酌みて身に入むセレナーデ 卓郎  
焼酎の希釈は濃目にレモン水 京子

鈍色の海にぼつんと浜日傘 いちい  
柘榴色のマニキュア塗りて夏至の夜 〃  
風を入れ締むる夏帯浅標 〃

走る児を追ひかける母夏帽子 敏江  
齒並びのやうに白シャツ集り来 妙子  
抗へず夏もスーツの宮仕へ 峰雄  
濃紺に粹の一文夏夏のれん 慶子  
しのぎを削るヨットの帆と帆波高し 鶴城  
——以上特選——  
ひまはりの黄色悲しき過去を持ち 千春  
子らの声水辺に響き夏ふかし 亜弥子  
カラコロとゆかた姿の外国人 恵美子  
夏シャツにカレーうどんの染み一つ 慶子  
行き摺りに涼残しゆく白雨かな 峰雄  
若い娘の着こなし上手夏衣 敏江  
ひなつばめ指先ほどの口黄色 妙子  
祭半纏毗紅さす女伊達 みどり  
ただ眩しモンローウオークの水着 鶴城



第三・若松合同例会(東京)

五明 昇報  
正木 萬蝶

打水や水神祀らるる社

水打ちて露地に昭和のにはひ立つ

打水や甕りゆく黒御影

打水や一番星が姿見せ

小流れのさやぎを杓に水を打つ

打水に江戸の風湧く神楽坂

打水の小路に洩るる三下り

——以上特選

飛石をよけて水打ち賓の客

打水も修行の一つ若女将

水打ちて羽二重餅と珈琲と

打水の黒堀盛り塩石畳

打水す生家の土の香をもとめ

園児らの歓声悲鳴水を打つ

打水や女将の恋の泣き所

水撒きのホース取り合ふ兄妹

打水や好き風抜くる京町家

打水や土のにはひと日のかから

打水の歩きたき路地神楽坂

打水や隣家先へも御裾分け

詠子 詠子 京子 星歩 徹雄 昇 月を 詠子 詠子 千春 ひろこ 慶子 萬蝶 京子 マスミ 理恵 康世 千祐

第四例会(浦和)

石井喜恵 反町修報

松韻のさやかなる宿秋近し

一筋の飛行機雲や秋隣

睡蓮や水面に映る太鼓橋

秋近し流水に聴く濤の音

溶暗の沼未草しろじろと

石庭に波打つ白砂秋近し

身の内に祈りの刻や花睡蓮

秋近し浅間の空にレンズ雲

睡蓮や葉の間に覗く赤き鯉

浮き城の睡蓮写生日曜画家

小さき池に白き一輪未草

グラス二つ並べ秋待つきみを待つ

順子 邦人 佐江 星歩 鶴城 雅夫 徹雄 順子 邦人 佐江 星歩 鶴城 雅夫 徹雄 翔太 光子 修 昇 由紀子 マスミ 喜恵 以上特選 曆文 修 克己 章子 由紀子

第五例会(浦和)

河野はるみ 岡田宣子 報

線香花火なぜか短かき恋ばかり

夕風や朱の鳥居の厳島

夕風やバランス保つ鹽船

夕風やぼんやり点る波止場の灯

線香花火肩を並べて息凝らし

花火船右に片寄る隅田川

夕風や瀬戸の小島の点点と

夕風や干物取り込む漁師妻

夕風の台場を渡るゆりかもめ

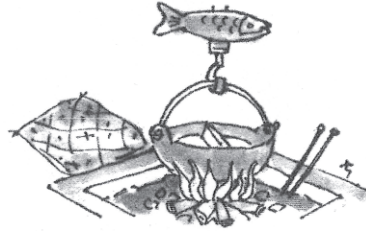
捨小舟波間に聞こゆ遠花火

日の暮れを待てず花火を還る子かな

夕風や大漁旗のだらり帯

昇 マスミ 恵子 延昭 行雄 光子 翔太 喜恵 千祐 章子 宣子 宣子 千祐 知子 章子 是るみ 以上特選 義子 宣子 千祐 知子 章子 是るみ

# 各地句会



## 水明澤つくし句会 (大阪)

梔子のぬらぬら句ふ夜雨かな  
夕立来て上ル下ルの京街道  
谷川でのんびり鮎釣る翁たち  
明易や火勢強むる登り窯

智恵子  
人美  
ノルン  
洋子

## 和歌山水明句会 (和歌山)

ほととぎす秘湯の夜明けひとり占め  
星よりも光すがしき初螢  
蓮の葉一面歩きてゆけさうな  
一階へ寢室うつし青簾  
初めてのベトナム蓮に目を見張る  
軽梟の子や身を寄せあひて用水路  
機体右へ傾ぎて麦野しかと見ゆ

## 円卓の会 (浦和)

早星寝惜しむ町に朝は無い  
蹲踞や水面に掬ふ夏茜  
特攻の飛び立ちし野や夏茜  
炎昼や麻辣湯は女子ばかり  
炎天の海のうめきや艦棺  
絵日記の最初のページ夏茜  
炎昼や天然水を持ち歩く  
夏茜すがる入り日の滞つくし

## 若鮎句会 (浦和)

秒針のわづかな狂ひ我鬼忌かな  
河童忌や蹠残る指の股  
香水の残りに揺るる終電車  
香水や忘れるといふ選択肢  
河童忌をトロッコでゆく黒部の湯

和子  
千枝子  
千世子  
満耶子  
きわゑ  
洋子  
廸代  
京子  
修  
道  
拓真  
鶴城  
翔太  
月郎  
卓郎  
秀子  
稀香  
真  
晃  
山菜

河童忌や地下神殿の吾ひとつぶ  
香水の渦に吞まれてバスの朝  
河童忌やSNSに変な人  
妖怪の来迎見たき餓鬼忌かな  
全集を枕にごろ寝我鬼忌かな  
青き夜やシトラスの香のほどけゆく  
柿の木塾 (浦和)

仏縁にすぎる廂や大夕立  
触れもせでくるりと爆する鳳仙花  
鳳仙花大きな声でけんけんば  
夕立や車道一時洗ひ行く  
村雨や天狗に会ひに霊山に  
風向きの変はり夕立来る気配  
なごみの会 (浦和)

遠雷や牛の鼻環のきらりとす  
語部のぽんと膝打つ扇かな  
はたた神とんがり屋根の道の駅  
虫干や捨てたきものを捨てられず

## 越後の会 (浦和)

里帰り腕いっぱいの青田風  
北窓に白影揺るる半夏生  
夏草に埋もるる地下の美術館  
銀輪の青田波翔け散居村

ひとみ  
貴  
拓真  
芳春  
月を  
喜夫  
昇  
かつ子  
恵子  
章嘉  
節代  
和子  
かつ子  
喜恵  
茂子  
節代  
真理  
知子  
宣子  
翔太

## 芙蓉句会（浦和）

街路樹のそよりともせず夏盛り  
中天に真夏日被きそば啜る  
団欒に犬も加はり夏休み

美子 仁 税子

めだか句会（浦和）

街路樹のそよりとともにせず夏盛り  
 中天に真夏日被さそば吸る  
 団欒に犬も加はり夏休み  
 芽吹句会（浦和）  
 西の窓ぐんぐんのぼるミニトマト  
 片側に並ぶ古書店片かげり  
 片蔭に吸ひ寄せらるる通勤路  
 夏空に鯉の切り立つ名古屋城  
 祖母いまでも遠ざかりゆく片陰り  
 ゴッホ展出て片蔭のカフェテリア  
 片かげり見知らぬ人と会話して  
 再会の名残尽きねど夏の宵  
 片蔭や一列で待つ赤信号

税子 仁 美子 富子 修 おにこ 久美子 ひろこ 弘子 千重子 チアキ 道を

日盛や独りこの世にゐるやうな  
 空蟬の生あるごとくしがみつ  
 空蟬ややりたし事を書き出して  
 はまなすの花が先導浜の道  
 空蟬や地質調査は穴だらけ  
 空蟬や美田残さずけふ生くる  
 参道の風鈴ゆれて神移し  
 空蟬や空映したる乾きし目  
 日盛りを共に届けし宅配便  
 ふるさとの山なみ低し日盛る  
 立ちすくむ犬の三歩や日の盛  
 日の盛り木陰で梅の握り飯  
 アスファルトのラメきらきらと日の盛  
 日盛りや開始サイレン十六秒

惠美子 和子 妙子 眞理子 六弦 道代 尚己 美津子 眞美子 莊志 樂 月を はるみ 知子

懃めや寝そびれし夜の水中花  
顔役の指示が飛交ふ夏祭  
地下バーのカウンター隅水中花  
櫟の会（浦和）  
昼顔の花を摘みしか雨催ひ  
市民マラソン西瓜の並ぶ給水所  
昼顔や古民家カフェへの道すがら  
雅子皇后光り輝くバルコニー  
赤き帆の西瓜崩しつ独り言  
若枝の会（浦和）  
恍惚の母の転院百日白  
通ひ路の目の端にいつも百日紅  
若狭水明俳句会（若狭）  
夏浅し水田横切る夕電車

小梅の会（浦和）

みづまんぢゅうぶるんぶるんかぜをよふ  
折りかけの飛行機残し夏の雲  
特急は嫌だ家点点と青田風  
半夏生友と語らふテラス席  
箱根山紫陽花の道富士隠す  
中年やトマト嫌ひのトマト好き

道隆啓隆進惠  
を然子文子

夕日差し輝く一瞬水中花  
向日葵に花屋の主役とられたり  
自治会の役員多忙祭りの日  
初恋の思ひ届かず水中花  
カウンターにいま全開の水中花  
九十の友は健やか水中花

美紗子 真理 美智枝 美子 公子 啓子

懨めや寝そびれし夜の水中花  
 顔役の指示が飛交ふ夏祭  
 地下バーのカウンター隅水中花  
 襟　　の　　会（浦和）  
 昼顔の花を摘みしか雨催ひ  
 市民マラソン西瓜の並ぶ給水所  
 昼顔や古民家カフェへの道すがら  
 雅子皇后光り輝くバルコニー  
 赤き帆の西瓜崩しつ独り言  
 若　枝　　句　　会（浦和）  
 恍惚の母の転院百日白  
 通ひ路の目の端にいつも百日紅  
 若狭水明俳句会（若狭）  
 夏浅し水田横切る夕電車  
 夏浅し覗ひて廻るウインドー  
 真つ白なシャツの眩しき夏はじめ  
 年号の三つを生きて牡丹咲く  
 白牡丹散る一片の音残し  
 天水に棚田ふくらみ海薄暑  
 大輪の牡丹崩る暮れの寺  
 夏浅し厨に満つる酢の匂ひ  
 白牡丹子供歌舞伎のおちよぽ口  
 夏浅し釣り糸描く放物線

和郁保寛初夕風笑 泰貞 千文富朋あ 輝和洋  
ことは風子人久花月湖鼓風 生代 重子子子子 翠子子

長谷寺の胸打つ牡丹見し日かな  
外泊を待ちわびる母花曇  
夏浅しマネキン人形の配置替へ  
牡丹や言はずともある胸の内

水明熊谷句会 (熊谷)

虫干や二階日本間帯の川  
背徳の恋の終焉夏の菊  
夏菊や五百羅漢を巡る径  
土用干はとの母の香絵羽羽織  
自然体が一番楽よ合歡の花  
捨てられぬ細身のドレス虫干す  
虫干や母の遺愛の五つ紋  
大罪人も悪女も共に土用干  
虫干の舞台衣装や旅一座  
野の寺の夏菊浮かぶ手水かな

若楠句会 (浦和)

良き人と出会ふときめき夏茜  
如雨露口降りては離る夏茜  
早星明日は未定にしておきぬ  
異常気象いつか地球も早星  
火輪より生まれ出づるや夏茜  
じりじりと年を重ねて油蟬  
夏茜工場跡の草高し

祥子  
風花  
自然  
友夏

病みて夏まだ生きられて年らら  
年寄りと呼ばれたくなき夏の果  
万年筆の流るる文字やみづすまし  
眠らないビル街早星高し

蘭の会 (浦和)

茂子  
風子  
徹平  
秀子  
忠男  
君夫  
栄子  
道子  
翔太  
卓郎

幼子の湯気立つつむじ草いきれ  
揺するまい手花火の玉落すまい  
ボンボンを銀の菓子器に夜の秋  
手花火や妹の手に兄の手が  
手花火やばつんと落ちて夜の庭  
手花火や膝美しく折る乙女  
干し物の一枚きりや草いきれ  
切つ掛けは線香花火共白髪  
草いきれ遠き記憶のかくれんぼ  
遣されし家の片付け草いきれ

新樹の会 (浦和)

宏治  
風舎  
操

檜扇が客を迎ふる老舗宿  
名人戦余裕の棋士の扇子かな  
一反に満たぬ柵田の青田風  
夕星や胸に差し込む舞扇  
白扇をしきりに煽ぐへば将棋  
反古にする便箋の数夏の果

葉子  
久美子  
楽  
美津子

慶子  
鶴城  
直子  
真由美

たかな俳句会 (川口)  
バンガロー研ぎ澄まされし夜の静寂  
食べ頃を待てましたと切るメロン  
片蔭を離る人みな影となる  
肩幅ほどの片蔭をゆく登校児  
手に取れば土の香残る庭の瓜  
郷愁を時に預けてメロン切る

鶴川山百合句会 (鶴川)

伸子  
小麥  
風子  
夕峰  
ひさお  
和子  
さよ子  
月を  
京子  
風舎

秩父路や天然水のかき氷  
五円玉母にねだつてかき氷  
女坂「あづきアイス」が溶けぬ間に  
変顔になつてしまふよかき氷  
練乳のとろみ懐かしきかき氷  
家元の口許ゆかしきかき氷  
氷水よりも冷えをる銀の匙  
舌だして見せあふ子らのかき氷  
背を向けて黙々と母胡瓜もみ  
氷食む隣の宇治金時白玉多し  
かき氷盛りて好奇の目の六つ

道修

珊瑚の会 (浦和)

徹雄  
風子  
清吉  
鶴城

手土産のこれはこれはの水羊羹  
滴りややぐらの奥の尼の墓  
滴りに誰が備へたる竹柄杓

小麦  
たみい  
のり子  
義子  
みち  
鶴城

喜恵  
マスマ  
昇

神の山鬼の山かも滴れり

水羊羹すうつと食める昼さがり

朝夕の勤行裏山滴れり

軍艦に似し一棹の水羊羹

滴りやコップ置きある山仕事

跡継ぎを見付く苦勞や水羊羹

秋、明句会（浦和）

子等去つて法師蟬の音ひびく部屋

法師蟬昨日と違ふりフレイシ

初秋や大正池をわたる風

鰯雲ひとつふたと数へけり

法師蟬俳句始めてしみじみと

初秋や書棚に義父の広辞苑

複式の峡の学校法師蟬

鰯雲西へ向かふの東なの

鰯雲ビルの谷間に漁場あり

武蔵野の空を満たして鰯雲

神戸大池句会（神戸）

終戦日田舎は何も変はりなし

蜜に寄る羽音かしまし木斛の花

コクーンシキルチャー俳句教室

（さいたま新都心）

嘶きを遠音に馬塞の蝸牛

白百合やビルの狭間の遊女塚

恵子

史代

広子

和子

かつ子

節代

知恵子

石田京子

道子

葉子

あけみ

鶴城

卓郎

はるみ

小林京子

道を

打水に生気の戻る紺暖簾

夏つばめ明け放ちたる通し土間

通り雨まいまいついと背を正す

きざきサークル（浦和）

夏めくや盛切で酌む田舎酒

夏きざす少女は羽化の途中なり

旬野菜玻璃の箸置き夏きざす

夏きざすパリティと乾く台ふきん

豪快な小兵のいびき大昼寝

がき大将昼寝の顔のあどけなし

びしよ濡れが嬉しき子等に夏きざす

俳句の手ほどき（山石楓）

無人で点る崎の灯台夏果つる

新涼やポニーテールの射貫く的

フーテンは旅する射的屋夜店商

次の一言早く言つてよソーダー水

トランプを射落とす射的夏祭

鉛筆を削る音止み秋隣

午後三時影くつきりと大暑かな

取柄の減りし下駄の音夏終る

白浴衣屋台の射的の上手き人

ひまわりは陽を食みて実を蓄へり

沙羅の花今宵ばかりと苔に咲く

夏休みのラジオ体操音空

早都子

洋子

由美子

昇

俱子

由美子

満智子

啓子

和

和子

髪型の隠す目元や宵涼み

まかり出て土塊のごと墓

野ばらの会（浦和）

立派さを競ふは無粋蓮の露

露時雨レンガ造りの蒸留場

蹲踞の苔に天与の光る露

門前の阿吽の像に露のつぶ

朝露にジーンズの裾盗まるる

あゆみの会（浦和）

雲の峰ファイトファイトと部活の子

グメが追ふ大漁旗や雲の峰

雲の峰九回裏のホームラン

水軍の馳せし海原雲の峰

ビル街の狭間急変雲の峰

雲の峰天下の険を睥睨す

ミモザの会（横浜）

語り部のお国訛や草の花

秋めきてミニ富士登頂山の日に

八月や冥界の門ゆるやかに

秋の雷話しの合はぬ夫とあて

麦酒干す漢の口に白きひげ

独り居の耳に優し風鈴買ふ

同窓会の君も白髪秋の蟬

更穂

かつ子

栄子

夏江

秀子

茂子

みき子

啓子

俱子

靖子

和

重子

藻好

玲子

美千子

萬蝶

由美子

栄子

慶子

亜弥子

母のおにぎり海苔・塩・梅と夏の朝  
黙禱を天地と海へ敗戦日

山の日の慰霊登山や秋の蟬

りんどう俳句会 (浦和)

二回裏遠くの山にいなびかり

稲妻やおのころ島の見え隠れ

芙蓉峰稲妻の中屹立す

稲びかり関八州を奔り抜け

酔芙蓉月を鏡に紅をさす

稲妻や妻居ぬ夜の箸の音

潮騒の海の暮色よ稲光

朴の葉に露数珠形の木曾路かな

蛸 蚪 の 会 (浦和)

街中に雲水の鈴初秋かな

初秋の不老はなしと地神の声

もの言はず枝豆つまむ父の酒

長き夜はロシア文学ロシアティ

鶏頭や恋情伏して文を書く

初秋の歩荷の鈴はりんと

笹竹に届かぬ文を飾りけり

霧の香や文色とどむる朝日影

根っこ付き郷の枝豆届きけり

雛 の 会 (浦和)

添へ書きに息災とだけ梨届く

おしろいや左は伏見右は京

白粉花夕餉を知らす母の声

隣人と交はす挨拶白粉花

たちまちに道の影伸ぶ処暑の朝

二階への階段ゆらぐ処暑の夕

添書の胸打つ二行処暑の文

阜 月 の 会 (浦和)

灯籠に二十四万刻銘者

手水舎の龍の水口処暑の風

満開の小梨の花の山開

大柄の兄二人乗る茄子の馬

記録係もベンチで涙秋の雲

備忘録の置き場忘るる十七夜

桂 子

喜 恵

輝 翠

チアキ

公 子

はるみ

佐 江

山 菜

光 代

珪 子

曆 文

さいち

更 穂

誤植訂正

二〇二六年九月号六九頁。

慎んでお詫び致します。

正 汗しとど朝靄をつく調教馬○

誤 汗しとど朝靄をつく調教場×

## 第 10 回「水明塾」のご案内

【日 時】 令和 8 年 10 月 31 日（土曜日）

◆午前の部 10：00 ～ 12：00（9：30 受付）

講演（対象：水明全誌友、同人、季音同人）

・ 講師：高柳克弘氏（「鷹」編集長、早稲田大学講師）

・ 演題：「芭蕉に学ぶ俳句の心」

◆午後の部 13：30 ～ 16：30（13：00 受付）

全句講評講座（対象：水明集作家）

（事前投句：当季雑詠 1 句）

パネラーによる全句の評価・推敲

【会 場】 浦和コミュニティーセンター 第 13 集会室

【会 費】 午前の部：2,000 円、午後の部：1,000 円

【申 込】 10月号に添付の申込書に会費を添えて 10月15日(木)  
までに発行所総務部へお申し込み下さい。

※午後の部の「全句講評講座」の受講者は申し込みと一緒に  
当季雑詠 1 句を投句して下さい。

※昼食はありません。昼食、飲み物は各自で持参して下さい。

※申込みの無い方は入場できません。

※状況によっては、内容を変更する場合があります。

※参加申込者で急遽欠席の場合は下記へご連絡をお願いします。

事業部部长 青木 鶴城

090-6709-1367

## 後記

十月号をお届け致します。今月号も無事に発刊できます。皆様のお陰です。誠にありがとうございます。

十月号の近詠欄は「故郷」がテーマです。七月号以来のテーマを引き継ぎまして、執筆者の二人が共通のテーマを話し合い、共詠しております。今後も共詠の企画を進めてまいりたいと存じます。

今月号には七月に開催されました水明の行事、夏行の関連記事が掲載されています。残念ながら御参加の叶わなかった皆様にも夏行の様子をお伝えし、是非来年は参加したいという心持になっていただければありがたく存じます。

加えて今月号には「季音賞受賞者」の欄を設けております。保坂翔太さん、横山君夫さん、笹本啓子さんの御三方に登場して頂きました。

各方の自選句と佳文と一緒に掲載しています。受賞者の肉声が聞こえて来るようです。

さて十月三十一日には水明塾が予定されています。午後の部は恒例の〈全句講評講座〉ですが、午前の部は、高柳克弘氏を迎えて講演会を企画しています。氏は藤田湘子に師事し、現在『鷹』の編集長として活躍されています。句集『未踏』や『涼しき無』などで各賞を受賞されています。また俳句の研究者としても多くの著作を著しています。『芭蕉の一句』『芭蕉と歩く』『おくのほそ道』『ノート』『隠された芭蕉』など多数です。水明塾では「芭蕉に学ぶ俳句の心」の演題でご講演をいただきます。奮ってご参加ください。

さて八月と九月は天候不順でした。地球温暖化とエルニーニョの所為だと考えます。初秋のすつきりとした季節感を秋の季語で詠みたいのですが、儘なりません。

九月のシルバーウィークの空模様が気になることです。皆様に置かれましては天候の変化に十分にご留意されてお過ごしください。  
(月を)

### 今月のはてな？

四萬部寺(しまふじ)  
浅縹(あさはなだ)  
麻辣湯(マラータン)  
木斛(もっこく)  
文色(あいろ)

頁 34 70 72 75 76

## 水明発行所受付時間

(048-822-4741)

曜日：(月・火・水・木・金)

時間：12時半～午後4時半

(土・日・祭日は休み)

水明の行事と重なった時は休み

(上記の時間には係がおりますので、

ご利用の方は 時間内をお願いします。)

## 水明

令和八年十月号  
通巻一一五三号  
令和八年十月一日発行

### 発行所

〒330-0064  
さいたま市浦和区摩訶不思議二丁目  
電話 048-822-4741

### ホームページ

「水明俳句会」で検索

### 誌代

半年分 七、五〇〇円  
一年分 一五、〇〇〇円

### 同人費 (誌代を含む)

一年分 二七、〇〇〇円

### 季音同人費 (誌代を含む)

一年分 三三、〇〇〇円

振替〇〇一七〇一〇一九三九三

### 発行人

山本 鬼之介

### 印刷所

中央 美版

令和8年 水 明 塾 参加申込書

※文字は楷書で丁寧にお書きください。

■午後の部に出席の方は一句を投句ください。(当季雑詠)

参加申込書《申込締切 10月15日（必着）》

|                |              |            |
|----------------|--------------|------------|
|                | 午前の部（講演）     | 参加費 2,000円 |
|                | 午後の部（全句講評講座） | 参加費 1,000円 |
| ※出席に○をご記入ください。 | 合 計          | 円          |

上記参加費を添えて申し込みます。

令和 8 年        月        日

|     |   |     |            |
|-----|---|-----|------------|
| 住 所 | 〒 |     |            |
| 氏 名 |   | 電 話 | -        - |

[緊急連絡先電話番号]

|         |            |
|---------|------------|
| 電 話 番 号 | -        - |
| 電話所有者   |            |

※緊急時に備えて緊急連絡先をお届け下さい。

緊急時のみに使用し、他の用途には使いません。

【申込書送付先】

〒330-0064    さいたま市浦和区岸町4-10-21    水明俳句会

きりとりせん



一月号 十月十五日締切

※雪・月・花の該当欄を赤丸で囲む事

氏名(俳号)

題

[illegible]

(注意)

この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。

旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先（電話番号）

氏名（本名）

年齡

歲



水  
明  
集

一  
月  
号  
十  
月  
十  
五  
日  
締  
切

都・市・町名

都 市 町

氏  
名  
(  
排  
号  
)

最上部の枠から間を開けずに楷書で丁寧にお書きください。

(注意)

この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。

旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先(電話番号)

氏名(本名)

年齢

歳



山紫集

一月号 十月十五日締切

氏名(番号)

一月の兼題

「山粧ふ」(傍題可)

投句対象者 同人及び季音同人「花欄」「月欄」

※最上部の枠から間を開けずに楷書でお書きください。

|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|

(注意) この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。

旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先(電話番号)

氏名(本名)

年齢

歳



鼓笛集

一月号 十月十五日締切

※当月は青木鶴城選です。

※当季雑詠で一句を投句ください。

※投句対象者 水明集の同人に限ります。

|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|

※最上部の枳から間を開けずに楷書でお書きください。（鉛筆書きは不可）

（注意） この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。

旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先（電話番号）

氏名（本名）

年齢

歳

|        |  |
|--------|--|
| 氏名（俳号） |  |
|        |  |



## 季音抄

山本鬼之介

人形の髪に挿したる野紺菊  
夏霧やぐらりと揺るるロープウェー  
蜥蜴出で翳と日向の曖昧に  
秋近し流木に聴く濤の音  
夏の星語りは尽きぬ美らの浜  
睡蓮の静寂に浮かぶ鯉の口  
かき氷くづしても崩しても才女  
身に入むや母の形見の一つ紋  
夏菊や出棺に鳴るクラクション  
あそこらが竹屋の渡し星祭  
郷愁を時に預けてメロン切る  
壮年の秘めたる心花木槿  
悠久の頁をめくる曝書かな  
夕顔や昭和演歌に「夜の蝶」  
風の盆胡弓におされ告白す  
読み解けば怖きグリムの書を曝す  
玄関が開きさらりと処暑の風  
大柄な兄二人乗る茄子の馬

大場順子  
大村節代  
菊池ひろこ  
五明昇  
近藤徹平  
境延昭  
正木萬蝶  
河野はるみ  
大塚茂子  
檜鼻ことは  
青木鶴城  
日高道を  
越田栄子  
染谷風子  
梅澤輝翠  
菅原卓郎  
渋谷さいち  
新暦文

次の原稿を募ります。随時発行  
所宛、ふるってお寄せください。  
なお掲載については、編集部にお  
任せねがいます。

### ▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に  
鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内  
(句に雑誌名、句集名、刊行月  
を付す)

### ▼散歩道へ身辺トピック▼

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起  
きた面白い話題、めずらしい経験  
などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内  
(題をつけて)

### ▼山紫水明へ随筆▼

テーマ：自由

枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

水 明 抄

山本鬼之介

雨脚は生絹のひかり立葵  
露台へと登りくるかなアンタレス  
雲の峰谷を挟みて背比べ  
ボサノバのリズム誘ふ夏の風  
深海へいざなふ八つの籐寝椅子  
草むらの気象予報士雨蛙  
夕風やびたりと止むる能の足袋  
老鷺や山の暮らしの声の張り  
羽蟻来て机辺に騒ぐ雨上がり  
傾城のごと一瞥や蜥蜴去ぬ  
梅雨晴や左官二人の身の熟し  
月涼し夢二の女首やはし  
香水の遅れてかをる夜会巻  
西日受け縛られ地蔵の縄ごろも  
坪庭へ風入る夕べ夏料理  
香水を耳たぶに決め告白す  
看板の錆の光や夏至の街  
出産に立ち会ふ婿に玉の汗

本橋稀香  
飯田忠男  
倉田星歩  
丸屋詠子  
皆川更穂  
反町 修  
綿引まりこ  
寺町知子  
阿部幸代  
杉浦千祐  
内田章子  
田中弘子  
室井早都子  
森下山菜  
石黒由美子  
羽島秀子  
石関六弦  
元田亮一

| 水<br>明<br>例<br>会<br>案<br>内 | 句 会 名 | 日 時       | 会 場                      | 指 導 者   | 幹 事                  |
|----------------------------|-------|-----------|--------------------------|---------|----------------------|
|                            | 第一例会  | 第1日曜・午後1時 | 浦和コミュニティ(セ)<br>(パルコ・10F) | 山本鬼之介   | 菅 原 卓 郎<br>小 林 京 子   |
|                            | 第二例会  | 第3金曜・午後1時 | 本所ビッグシップ                 | 網 野 月 を | 山 中 み どり<br>青 木 鶴 城  |
|                            | 第三例会  | 第1月曜・午後1時 | 京 橋 区 民 会 館              | 山本鬼之介   | 五 明 昇<br>曲 淵 徹 雄     |
|                            | 第四例会  | 第1木曜・午後1時 | 浦和コミュニティ(セ)<br>(パルコ・10F) | 山本鬼之介   | 石 井 喜 恵<br>反 町 修     |
|                            | 第五例会  | 第3火曜・午後1時 | 水 明 発 行 所                | 山本鬼之介   | 河 野 は る み<br>岡 田 宣 子 |
|                            | 若松例会  | 第1土曜・午後1時 | 京 橋 区 民 館                | 山本鬼之介   | 正 木 萬 蝶<br>石 田 慶 子   |
|                            | 関西例会  | 第3日曜・午後1時 | 守 口 市 文 化 (セ)            | 大 橋 勉 代 | 森 本 早 苗              |